琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「河童」研究(上)

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2011-11-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22294

芥川龍之介「河童」研究（上）

小澤保博＊

A Study of Note on R.Akutagawa's *Kappa*

Ozawa Yasuhiro

はしがき

「河童」の典拠に就いては、早くからスウィフト「ガリバー旅行記」、バトラア「エレホン」、フランス「ペンギン鳥の島」等が吉田精一「芥川龍之介」（「新潮文庫」昭和三十三年一月）により指摘されている。現状を批判する為に、風刺の一手段として別の視点を持ってくるというのは現在でも有効であり、イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」（「山本書店」昭和四十五年）の中の山本七平（しちへい）（「日本人は安全と水はタダだと思っている」）は人口に膾炙（かいしゃ）されて成功した一例である。これは、安易な模倣を生みルース・ベネディクト「菊と刀」（「The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture」）は、現在の日本人が読むとお笑い物語である。この違いは、自国を風刺するのに基本的な知識と愛の欠落により真実から遠ざかるという事ではないかと思う。日本に長く住み続け、自国の事を棚に挙げて営々と日本社会の欠陥を捲くし立てる外国人が一頃持て囃された事があったが、今では下火になっている。スィフトの風刺は、十八世紀の英吉利社会への挑戦ではあるが自国に対して基本的な愛着が無ければ広く読まれる事は無かった。芥川龍之介「河童」も自己の人生に対する嫌悪、日本社会の現状に対しての満腔の不平に満ちているが、自己愛の変型として読むことは可能である。映画「猿の惑星」では、劣化して言語を喪失した人類に言語伝達能力を有する猿が、武装して襲い掛かる場面があったが、これは戦中仏領インドシナで帝国日本の捕虜になった著者の体験だそうである。劣悪な装備で防御に就く植民地の軍隊を蹴散らすゼロ式艦上戦闘機に搭乗の日本人の横顔を、武装した猿に置き換えた訣である。素朴進化論が支配した時期に、事実日本以外のいかなる有色人種の国も近代兵器を持っていなかった。それ故に亜細亜諸国は劣悪、貧弱な装備の少数の植民地軍隊の支配を受けていた訣である。数百年に及ぶ白人優位の支配構図を転倒させたのは、亜細亜諸国の支配のイメージを覆したのは、航空機と戦艦の近代装備で怒涛の如くに侵攻した日本人の行動である。

「河童」の作品世界は、従来の固定した生活感覚を転倒させた構図で目新しい訣であるが、芥川龍之介作品そのものが明治という前時代の反措定の意味あいがある。民族と国家の存続を賭けて苦闘した先人の苦労は、日露戦争の勝利により形骸化して次世代の芥川龍之介等により揶揄、嘲笑の素材と化した。芥川龍之介作品に見られる前世代に対する態度、英雄否定、美談否定は今日から見ればある種の時代風潮である。しかし、一方においては芥川龍之介作品が今日に残り得たのは、主題（テーマ）小説に堕する事なき作者の複眼的な思考である。芥川龍之介自身自戒するように、人は時代を超えて自己の属する集団の意思を超えて生存を許されるものではない。純朴、素朴、人の良さという演技で老人の寵愛を勝ち得て職を得た者は、終生自己の演

＊国語教育教室

技の世界の住民として人生を終わらなくてはならない。一つの党派に属する事で精神と肉体を制御して生きて来た者にとって、自己の犯罪行為を咎めた他者は唾棄すべき汚物である。特殊な政治集団、宗教集団に属した者同士の互いに掛け合う慰労の言葉は、他者に対する敵意と侮蔑に満ちている。「僕等は勿論樗牛の言つたやうに『現代を超越』など出来るものではない。」(「文藝的な、余りに文藝的な」十八)

結局、自分が認識する他者は自己の認識した等身大の他者であり、その人物の真実の姿からはほど遠い存在である。しかし、一方真実の他者とは何であるか、老人の寵愛を得る為に半生を素朴、純朴、人が良いという印象で地位を得た者は、生涯を相手のイメージを等身大で生き続けて人生を終わる。この場合、演技は最早演技ではない。司馬遼太郎の一連の戦国大名の物語に登場する徳川家康は、三河殿は律義者という太閤の人物評が先行している。太閤没後に家康は、本然の我に立ち戻って真実の自己を生きた訣で「大阪夏の陣」で陣羽織を羽織った自分こそ真実の自己で、太閤存命中の自分は仮象(しょう)の姿であったと言い訳するであろう。こう考えれば、言語の蓄積は虚しく真実は行動のみという事になるが、芥川龍之介は辛うじて複眼的な思考でこうした危機を回避した。

常識を転倒させ意表を突く作風は大正期の時代風潮の影響もあるが、芥川龍之介固有の創作行為の方法論に化したと言える。自己の素質とその趣向に合わせて摂取した諸作家の創作成果のスタデイにより、芥川龍之介独自の作風は確立したと言える。後年、太宰治「お伽草子」(「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」)等の作品は、明らかに芥川龍之介の模倣である。太宰治の学生時代の文学活動は、「最後の太閤」(「校友会雑誌」大正十四年三月)「地図」(「蜃気楼」大正十四年十二月)等が特記される。作品「最後の太閤」同人雑誌「蜃気楼」は、明らかに芥川龍之介の影響である。「お伽草紙」では学生時代の芥川龍之介からの摂取の様式が幾分か蘇った結果である。

芥川龍之介「かちかち山」(大正八年頃)(注1)は、吉田精一後記に拠れば「教訓談」(「現代」大正十二年一月)の草稿である。前者は、後者より複雑な内容表現であり、童話「かちかち山」をいくぶんか変形させ、象徴化して表現している。筋書き本体は、「かちかち山」を逸脱していないが、作品中に「雀」(「舌切り雀」)「鬼が島」(「桃太郎」)「竜宮」(「浦島太郎」)「櫻の木」(「花咲(はなさか)じじい」)等が使われている。「一人の老人」(「かちかち山」)は、狸に妻を殺されながら敵の狸が、兎に殺害されるのを遠望する。「童話時代の明け方に、一獣性の獣性を亡ぼす争ひに、歓喜する人間を象徴しようとするのであらう」(「かちかち山」)と言うのは、象徴的な一文であるが、これ自体では正確な意味は把握できない。近い将来人間の内部の獣が、欲望を剥き出しにして戦い続けるという予言的な文章であろうか。「かちかち山」に依拠した「教訓談」(「現代」大正十年一月)では、どのように記述されているか。第一に爺さんが婆さんの肉を食った話、第二にこうした非人間的な行為を成さしめた狸は、同じ同属である兎に亡ぼさせる。こうした状況を確認して、作者は次のような意見を述べている。「わたしはあの話を思ひ出す度(たび)に、何か荘厳な気がするのです。獣は獣の為に亡され、其處(そこ)に人間は栄えました。ツアラトストラでもこの話を聞けば、きつと微笑を浮べたでせう。」(「教訓談」)。

ここでは獣が獣を亡ぼし人間が栄える時代は、本当に恐怖の時代だ、それに気付かないあなたは兎に殺された狸と同類ですよ、というのが「教訓談」である。これも近未来に対する芥川龍之介の不安概念を象徴的に表現したものだが、統一的な意味は、正確に把握し難い。こうした象徴的な作品創作の成果を踏まえて最終的に「河童」成立に至った訣である。

「十大昔話」(「桃太郎(ももたろう)」「花咲(はなさか)じじい」「かちかち山」「舌切(したき)りすずめ」「猿(さる)かに合戦(かっせん)」「くらげのお使(つか)い」「ねずみの嫁(よめ)入り」「猫(ねこ)の草紙(そうし)」「文福茶(ぶんふくちゃ)がま」「金太郎(きんたろう)」)の中で芥川龍之介が作品化したのは、「かちかち山」「猿蟹合戦」「桃太郎」の三作である。「猿蟹合戦」(「婦人公論」大正十二年三月)も寓意に満ちているが、昔話「猿蟹合戦」の教訓話の常識を転倒させた反措定の意味あいがある。昔話「猿蟹合戦」では、握り飯を狡猾な猿に奪われた蟹が、蜂や臼の助力を得て猿殺害を実行して敵を討つ話である。「猿蟹合戦」の後日談では、宿敵猿を殲滅したと思しき蟹には平穏な日常生活が訪れたと推測される。芥川龍之介「猿蟹合戦」は、その後日談であり、言うな

れば「それからの蟹は」という副題を必要とする話である。

蟹は共犯の臼、蜂、卵共々猿殺害の容疑で逮捕、拘束されて起訴され主犯格の蟹は死刑で他の共犯者は終身刑である。猿殺害の罪で蟹を起訴した検事の弁に拠れば、握り飯と柿を交換した行為に就いての疑問の第一は、両者の間には交換に関する澄書が存在せず契約そのものが最初から無効である。第二の疑問は、交換すべき柿は熟柿か青柿かという但し書きはなかった。第三の疑問は、青柿を投げ付けた猿の行為に悪意を認定できないという。以上の検事の追及、論告に対して蟹の弁護人は、敗北を認めて蟹に対して「あきらめ給へ」と声をかける。弁護人の被告人蟹に対する言葉は、おとなしく死刑になれという意味か、弁護料の事か判定し難い。この辺の記述内容は、名作「ベニスの商人」の有名場面の引き写しの感がある。

蟹の死刑判決に対する世評は、どうか。蟹を極刑に処する事に対する賛同の意見が、圧倒的であった。蟹の猿殺害は、時代風潮つまり危険思想に毒された結果であり、倫理学上あるいは社会主義の観点から、さらには宗教上からも弁護すべき側面は見出せない。蟹の猿殺害を武士道の再来と賞賛した者は、時代遅れとして多数の賛同を得られなかった。主犯格の蟹の死刑後、その家族は悲惨な境遇に転落した。とりわけ愚鈍な三男の蟹は、親と同じく愚かにも再度木の枝にいる猿と好物の握り飯と柿との交換の話に乗ろうとしている。猿の甘言に乗った蟹の末路は、永遠の愚者のそれである。

> 兎に角猿と戦つたが最後、蟹は必天下の為に殺されることだけは事実である。語を天下の讀者に寄す。君たちも大抵蟹なんですよ。（「猿蟹合戦」）

この「猿蟹合戦」の末尾の一文は、明らかに泉鏡花「夜行巡査」（「文藝倶楽部」明治二十八年四月）の模倣である。「河童」以前に芥川龍之介は、「十代昔話」（「桃太郎」）を作品化している。「桃太郎」（「サンデー毎日」大正十三年七月）の創作はよく知られているように「支那游記」（「上海游記」十一）での革命三尊の一人章炳麟（しょうへいりん）との会見の折の発言から触発されたものだ。

上海の寓居での会見の一挿話を後年「僻見」（「女性改造」大正十三年三月―六月）で以下の如くに披露している。「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本國民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」（「僻見」）、ここで芥川龍之介が「僻見」で羅列した人物伝はいずれも架空の人物である。「桃太郎」も同列である事から、数年前に上海の仏蘭西租界にあった章炳麟の自宅で芥川龍之介が交わした話題は、民族の深層に刷り込まれたイメージの問題である事が判明する。手塚治「鉄腕アトム」の良好な印象で育った世代が日本のロボット産業を支え育てたという指摘が、識者から成されている。この連鎖で想像すれば、章炳麟が危惧した事態は鬼が島を征伐する桃太郎の姿を幼児から刷り込まれた日本人の集団が、将来的に大挙して支那大陸に上陸する事を心配した訣である。民族の深層に刷り込まれた印象は、容易に払拭（ふっしょく）出来るものではない。それは、個人の能力を超えたものであるという理解を芥川龍之介は示した。それが、「先生はまことに賢人である。僕は度（たび）たび外國人の山縣侯爵を嘲笑し、葛飾北斎を賞揚し、澁澤子爵を罵倒するのを聞いた。」（「辟言」）という言葉になったのである。

「河童」の舞台は、芥川龍之介の創作世界では馴染みの「日本アルプス」（「上海游記」一）である。この場所は少年時代の曾遊（そうゆう）の地であり、当初の印象では愉快な思い出の記憶が纏わり付いている。年譜に拠れば、東京府立第三中学校在学時に仲間と槍ヶ岳登攀の記録がある。「八月八日から中原安太郎・中塚癸巳男（きみお）・市村友三郎らと槍ヶ岳へ登った。小冊子『槍ヶ岳紀行』を作り、『槍ヶ岳に登った記』を書いた。」（「明治四十二年」十八歳）、この内前者の小冊子「槍ヶ岳紀行」は、現在葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」に翻刻されて今日知られている。後者の「槍ヶ岳に登った記」（「明治四十四年頃」）の方は今日全集で読む事は可能だ。元来この二つの先行作品が合作されて後年「槍ヶ嶽紀行」（「改造」大正九年七月）になったとされてきた。この三作品の詳細な関係に就いては、私自身「芥川龍之介『河童』成立考」（「琉球大学教育学部紀要第二九集第一部」）でいくぶんか言及したことがある。近年「芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋」（伊藤一郎「芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋」）の考証に拠れば、この三作品の関係は相当複雑で入り組んでいる。ただ、中学時代の愉快な経験を記録した「槍ヶ岳紀行」は、

順次孤独な単独紀行に変貌している事である。少年時代の仲間との愉快な槍ヶ岳登攀の記憶が、順次孤独な登攀記録に成っていった事については別の考察が必要である。三作品を背後で創作した著者の精神変貌の足跡に沿った考察である。後年「支那游記」(「上海游記」一)で上海航路の船酔いに苦悶する芥川龍之介は、肉体的な苦悶を忘れる為にあらん限りの愉快な記憶を呼び起こす訣だが、その一つに「日本アルプス」がある。これは、前記の三作品の事ではなくて三作品に形象化された中学時代に親しい友人達と挙行された十八歳の時の槍ヶ岳登攀の体験そのものを三十歳の芥川龍之介が、想起している訣である。こうした思考経路を経て最終的に以下の記述になった。

三年前の夏(「大正九年六月、芥川は穂高山に登山した。」)のことです。僕は人並みにリユツク・サツクを背負ひ、あの上高地(「長野県にある日本アルプスへの登山口。避暑地としても有名。」)の温泉宿から穂高山へ登らうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川(「北アルプスの深い谷を作って流れる川。穂高山に発し犀川となる。」)を溯る外はありません。(「河童」一)

「河童」の構造は、精神病院に入院中の患者が河童の国に紛れ込んだ私的な体験を訪れる客に語る奇妙な譚である。この人物は本文中では「僕」と自称しているが、明らかに作品「河童」創作時の作者の自画像に重なる。芥川龍之介自身、吉田泰司(「白樺系統の批評家。この批評は倉田百三の『生活者』に出る。」)宛書簡で「あらゆる『河童』の批評の中にあなたの批評だけ僕を動かしました。(中略)河童はあらゆるものに対する、一就中僕自身に対するデグウ(「dégoût(仏)。嫌悪。」)から生まれました。」と感想を遺した。この執筆動機は明瞭に作中に取り入れられていて、精神病棟に幽閉された患者は河童国で過ごした体験を語るごとに自己嫌悪で罵声をあげるのを常にしている。「出て行け! この悪党めが! 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、虫の善い動物なんだらう。出て行け! この悪党めが!」(「河童」序)(註2)

養家に育った芥川龍之介は、終生本然の我を生きることを許されなかった。「他人のパンがいかに辛く／他人の家の階段の上り下りがいかに辛い道であるかを」(「神曲、天国篇第十七歌五十八、五十九」)という煉獄の日々から逃れることは出来なかった。その窮屈なチョッキを脱いだらよかろうと忠告した佐藤春夫は「有島生馬君に與ふ」(「新潮」大正九年一月)を一読、芥川龍之介を賞賛した。君は常にあのように旗幟鮮明であってほしいという感想を寄せた。また癇癪を起こした芥川龍之介が、湯飲みを縁石に投げつけた行為を聞いてその自然な振舞いを容認した。佐藤はあまりに浴衣掛けだからと率直な感想を芥川龍之介は寄せたが、谷崎潤一郎もまた芥川龍之介と同趣旨の意見を佐藤春夫に投げかけている。芥川龍之介没後、谷崎潤一郎の家に同宿した佐藤春夫に対して以下のような発言をした。「お八重は馬鹿なくせに料理だけはうまい—。君のやうな田舎者には食つてもわかるまいが」(佐藤春夫「この三つのもの」)。

後年、太宰治もまた「出て行け！この悪党めが！・・・・・・」(「河童」序)と叫んだ芥川龍之介と同じ地平に追い詰められている。遺された遺書「みんな、いやしい慾張りばかり。井伏さんは悪人です。」は、芥川龍之介よりもさらに切実、緊迫感に溢れている。一般的に「河童」の作中人物は、精神的な変調を兆して芥川龍之介、広津和郎の世話で斉藤茂吉の精神病院に入院、隔離された友人宇野浩二の肖像を自らの自画像に重ねて執筆造型されたように思われているがそうではない。近い将来自身が追い込まれるやも知れぬ精神病棟での隔離生活を焦燥、戦慄の心理で描いた訣である。芥川龍之介年譜に拠れば、「河童」脱稿(「昭和二年二月十三日」)であるが、宇野浩二の発病(「昭和二年五月三十日」)である。「河童」で造型した精神病患者の実態を親しい友人の入院でまのあたりにして、厳粛に自己の行く末に危惧を抱いたというのが本当である。

「出て行け！この悪党めが！・・・・・・」(「河童」序)と叫ばせた芥川龍之介の精神の深層には異常な空虚がある。彼のこの心の空洞を説明することは出来る。「歯車」(五)で熱心な基督教信者とのやり取り、問答を記録しているからである。

或東かぜの強い夜、(それは僕には善い徴だつた。)僕は地下室を抜けて往来へ出、或老人(「作者はしばしば室賀文武を訪れてキリスト教について話し合った。室賀は新原家〔作者の生家〕の牛乳配達をしていた人で、その後内村鑑三に入門してキリスト教を信仰、雑貨の行商人となり、このころは銀座の聖書

会社に勤務していた。春城と号して俳句集もある。作者は『春城句集』序〔大正六年〕および『素描三題』〔昭和二年五月〕の『武さん』の項でその人柄を伝えている。」）を尋ねることにした。（中略）「何もむづかしいことではないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行(おこな)つた奇蹟を信じさへすれば・・・・・・」「悪魔を信じることは出来ますがね。・・・・・・」

ここで精神、肉体共に衰弱した芥川龍之介に向かって旧知の老人は、絶対者に帰依する為に自我を捨てよと言っている。しかし、自我を捨てる事は彼芥川龍之介に取っては作家的な自殺行為である。最晩年の芥川龍之介は、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」（夏目漱石「行人」）という局面に立ち至り最初宗教に救いを求め、次に狂気の世界に陥る事を危惧して自殺して果てるのである。

内面の空虚、自由意志という精神の根底を芥川龍之介は、作品世界で精緻、巧緻に説明し得なかった。統一的意志で世界解釈をして、人生で直面する森羅万象を個別に理解しようとして自我は、分裂しその精神は深淵に堕ちた。世界解釈を統一的な色彩で理解できず、精神内部で分裂し、虚無、空虚な内面を抱えた太宰治の場合は、共産主義からの脱落意識、基督教の救済を望めぬ自身の分裂した自我を「父」（「人間」昭和二十二年四月）で以下のような文章でその精神の混沌を記述している。

私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれてゐる。その文字は、何であるか、私にもはつきり讀めない。たとへば、十匹の蟻が、墨汁の海から這ひ上つて、さうして白絹の上をかさかさと小さい音を立てて歩き廻り、何やらこまかく、ほそく墨の足跡をゑがき印し散らしたみたいな、そんな具合ひの、幽かな、くすぐつたい文字。その文字が、全部判讀できたならば、私の立場の「義」の意味も、明白に皆に説明できるやうな氣がするのだけれども、それがなかなか、ややこしく、むづかしいのである。

共産党の鉄の規律、党員を外部からの命令で束縛し精神の動揺を静止させ、自己の属する世界にのみ正義があり、自己の犯罪はすべて許され他者の成したいかなる瑕瑾(かきん)をも容赦せず死刑を他者に宣告しえる強固な精神を希求し、求め得なかった太宰治を志賀直哉は「共産主義からの没落意識」（「太宰治の死」昭和二十三年）という言葉で表現した。太宰治の方の立場から見れば動揺する精神を外部から固定する為に奔走した共産党員としての足跡、党組織の一部になる事、組織細胞となる事で外部の反応に呼応する自己内部の動揺を制圧出来る、という可能性を喪失して基督教を希求したのである。

共産党の組織細胞として活動していた時期、太宰治は自分の胸の奥の白絹に書かれている無数の文字を自覚することなく生活する事が出来た。党生活者としての日常が破綻した時に突如として胸の奥の無数の文字が虚無としてその存在を主張してきたのである。戦時中、神州不滅を叫び村上兵衛に拳銃を突きつけた同じ人物が、戦後共産党員として人民裁判を主催してモスクワの命令を伝達している現場が目撃されている。党組織から離脱した後の太宰治は、基督の福音に身を委ねた。結果的に彼を終生拘束したのは、イエスの福音「それ我(わ)が来れる人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜(しゅうとめ)より分たん為なり」（「マタイ傳」十章三十五節）であり、具体的には「家庭の幸福」を破壊する行動で示された。

本論

1（「序」「一」）

「河童」の語り手である或精神病院の患者は、「東京市外××村のＳ精神病院」（「もと東京市外巣鴨村にあった巣鴨精神病院。芥川は小説を書くためここを見学した。」）(註3)に収容されて見舞い客に対して自分が見聞した河童国に就いて語る。彼の様子を作者は、次のように描写している。

「彼は唯ぢつと両膝(りゃうひざ)をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、（鉄格子(てつがうし)をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない樫(かし)の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。）(註4)

精神病院の患者として自己の体験、河童国の見聞を語り合った後に彼は「出て行け！この悪党めが！・・・・・・」という罵声を訪問客に浴びせるのである。つまり、彼は河童国で体験した見聞を人間社会に持ち込みその体験を信じた為に現在精神病棟の患者として日々を送る事になっている訣

である。風刺小説「河童」の前提は、日本社会の秩序に対して反旗を翻せば狂人として精神病棟に収容されるという現状告発である。芥川龍之介が、こうした複眼的な思考によって作品執筆が出来たのは、英文著書の読解で当時の一般的な日本社会を超越する事が出来たからである。日本社会は、現在も無数の派閥の乱立する複合的な社会である。自己の内部の派閥に属する者に対して恩寵を与え、縁に属さない者に対して処罰を与える透明な掟に束縛された拘束社会である。日本社会、国家から幾分離脱している琉球国に半生を生きた私は、身を持って日本教徒の生き方を仄聞している。日本社会で高貴な処世で人生を生きた者は、琉球国に渡来した瞬間に文字どおり支那大陸に武力侵攻した日本陸軍兵士のような振る舞いに変貌する。旅先で乱暴狼藉を働く者は、日常で生活を束罰され不必要な演技を強いられているからであると言う。日常自由な著述業に身を委ねている私は、旅先では花鳥風月の心境であるというのが色道の達人吉行淳之介の言である。

三年前の夏(「大正九年六月、芥川は穂高山に登山した。」)のことです。(中略)僕は前に穂高山は勿論、槍ヶ岳にも登つてゐましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登つて行きました。(註5)

「しかし僕に意外だつたのは河童の体の色のことです。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帯びてゐました。けれども今は体中すつかり緑いろに変つてゐるのです。」(一)、河童の形態に就いてのこの箇所はすでに早くに芥川龍之介により認識されていた。「河童」(「新小説」大正十一年五月)において「いや、わたしは河童の皮膚も、カメレオンの皮膚の通り、随時随所に変化する事を確信してやまない一人である。」(「河童」序)と記録している。芥川龍之介「河童」(序)は最終的に未完に終わったが、五年後の「河童」(「改造」昭和二年三月)は未完に終わった「河童」(序)の後日談の意味あいがある。「河童」(序)では、芥川龍之介は河童の特色を三つ挙げているが、その一つは「(一)周囲の変化により、皮膚の色彩も変化する事、カメレオンと異る所なし。」である。

河童に就いての知識の蓄積は芥川龍之介自身の語る所に拠れば、柳田国男「山島民譚集」である。「河童の考證は柳田国男氏の山島民譚集に盡してゐる。・・・・・・」(「雑筆」水怪)。「雑筆」(「人間」大正九年十一月)のこの自身の語る所に拠れば芥川龍之介の河童に就いての知識の拠り所は、柳田国男の著作とさらには近親からの伝聞、聞き書きである。

「僕は滑かな河童の背中にやつと指先がさはつたと思ふと、忽ち深い闇の中へまつ逆さまに転げ落ちました。」(一)、一瞬に異次元世界に転がり落ちて異色経験を体現した後に現状に復帰して体験談を語る構造は、概して普遍的なもので芥川龍之介の独自な視点ではない。前掲、羽鳥徹哉「芥川龍之介『河童』注解」では、この箇所の典拠をいくつか上げている。

「ガリバー旅行記」「不思議の国のアリス」「南柯太守伝」(「唐宋伝奇小説」)昔話「おむすびころりん」柳田国男「鼠の浄土」等である。(註6)

人間世界から河童世界に下落する瞬間に「僕」は瞬時に「河童橋」の記憶が、脳裏を掠めるが次には記憶を失ってしまう。芥川龍之介流の理性に依れば、「僕」はこの瞬間に理性を喪失して狂気の世界、彼自身の主観的な世界に踏み込んでしまったという事であろう。理性と狂気の世界を往き来する異常な状態の友人宇野浩二を数ヵ月後に目撃し、これが芥川龍之介に青酸カリ自殺を決行させた最大限の要因である。(註7)「僕は『あつ』と思ふ拍子にあの上高地の温泉宿の側に『河童橋』と云ふ橋があるのを思ひ出しました。」(一)、これなども危機に際しての人間の無意味な行動を的確に把握している。芥川龍之介は、関東大震災などで人間の集合的な妄想行為、あるいは個人の愚かな無目的な行為を目撃していて「僕」が瞬時「河童橋」を脳裏に想起するという行為の表現になったのであろう。転落の瞬間に「河童橋」が脳裏を掠め、人間界の意識を失う瞬間を「僕は唯目の前に稲妻に似たものを感じた」(一)と表現した。(註8) この箇所は、芥川龍之介自身の一時的な仮死体験の記録でなければならない。竹山道雄もまた幼児の仮死体験から奇跡的に生還を成した経験から基督の福音に対して成人後決定的な疑念を抱くに至った、肉体喪失後にそれに付随する霊魂に意識の持続はあり得ないと。

2(「二」)

人間世界から河童世界に転落した「僕」は、人間

を辞めた訣ではない。それどころか河童住民に混じって生活する希少な人間として尊重される事になる。「僕等は唯河童ではない、人間であると云ふ特権の為に働かずに食つてゐられるのです。」(二)(註9)

ここで芥川龍之介は、河童の言語を登場させている。「Quax,quax」(「おい、おい」)「Quax, Bag, quo quel quan?」(「おい、バッグ、どうしたんだ」)という二つの文例である。

この河童語の依拠する言語は何か、文字の形態に就いては、「時計のゼンマイに似た螺旋文字」(四)という芥川龍之介による説明がある。前記の二例の河童の例文は、この螺旋文字をローマ字表記したもの、つまり河童語の発音をローマ字で綴った事が判明する。この二例の河童語が、その発音は蛙の鳴き声を模している。「蛙の擬声語に響きが似ているのは、水辺に出没するとされる河童の声帯を、両生類のそれに近いものと擬したためか。」(「芥川龍之介『河童』注解」二)と説明されている。

ここでは芥川龍之介は、河童の生態に就いての日頃の蘊蓄を二つ程披露している。一つは河童の身長が一般的に人間より低いことであり、もう一つは河童が常日頃から悪戯好きであることである。「河童の身長に合はせてありますから、子供の部屋に入れられたやう」「いきなり立ち上ると、べろりと舌を出したなり、丁度蛙の跳ねるやうに飛びかかる気色さへ示しました。」(二)

3(「三」)

(三)は(二)の続きで芥川龍之介自身の河童に就いての知識を記述している。「頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水掻きのついてゐることも『水虎考略』(「文政三年〔一八二〇〕古賀煜著。水虎〔かっぱ〕の事を『和漢三才図絵』などの書物によって考証図解したもの。」)などに出てゐるのと著しい違ひはありません。」(三)という但し書きの後に河童の形態が列挙されている。(①身長は1メートル程度②体重は20～30ポンド③頭のまん中に楕円形の皿がある④周囲の色に同化する⑤腹に袋を持っている⑥腰の周りを蔽はない)と言った類の特色を列挙している。

芥川龍之介が「水虎考略」をどの程度に掌握し利用したか不明だが、前掲「芥川龍之介『河童』注解(三)の記載に拠れば柳田国男「山島民譚集」(「河童駒引」)には「水虎考略」「水虎考略後編」に収録の伝承が多く採られているそうである。その具体的な事例として「滑かな河童の背中」(「河童」一)と言う記述は、柳田国男「山島民譚集」(「河童駒引」)に該当の一文がある。

芥川龍之介が列挙した河童の特色①②は、「水陸両棲ノ動物ニシテ形三四歳ノ童子ノ如ク」(「沖縄語典」)「十歳バカリノ小児ノ如ク裸形ニシテ能ク立行シ人語ヲ解ストアリ。」(「遠野物語」)から採集した「山島民譚集」(「河童駒引」の事項から類推した一文である。③に就いても「頭ノ中央ノ窪ミニ水ノアル為ナルコトヲ前以テ知リシガ故ニ」(「河童駒引」)という記述があるが、ここは河童に就いての一般的な知識からの筆記であろう。④の記述内容は、数年前の未定稿「河童」(序)において同趣旨の一文を認めている。「周囲の変化により、皮膚の色彩も変化する事、カメレオンと異る所なし。」(「河童」序)とあるがこの記述も依拠するところは「山島民譚集」である。筑後川流域では、河童の肌膚は褐色で三河越前では青黒いと紹介されている。「水中ニ在ツテハ透明ニシテ形ヲ見ル能ハズ」(「河童駒引」)以上のような知識から④の記述になったと思われる。⑤⑥の河童に就いては、芥川龍之介の思い付きである。但し、⑥に就いては「○河童國。荘重の事を云ふと笑ふ。すべてを逆にせよ。」(「手帳」五)の反映で、芥川龍之介は創作ノートの記載事項をなぞったわけである。

さらに「手帳」には、掲載順序は離れているが「河童」創作の示唆が散在する。「○カツパの語源。たとへばBAPRR(莫迦)はBAP(荘厳)より来るが如し。又カツパには月光も日光なり。」(「手帳」九)、「○河童國。遺伝的義勇隊。」(「手帳」九)。前者は河童の言語と表記に疑念を記した問題に関係するし、後者は「河童」作品中に取り入れられている。「河童」素案に関する事項が、「手帳」に散在するのは元版全集編集者の配慮が足りなかった結果ではないかと思う。

4(四)

寓話作品としての「河童」の作品的な転回は、この辺から顕著に成って来ている。「河童は我々人間の真面目に思ふことを可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがることを真面目に思ふ」(四)、この場

面がすでに引用の「手帳」(五)の「〇河童國。荘重の事を云ふと笑ふ。すべてを逆にせよ。」の覚書の具体的な記述であることが分かる。最初に芥川龍之介が、問題視しているのは、当時の日本では切実な問題であった産児制限に就いてである。誕生以前に本人の意思確認をして後に生誕の有無を決定する場面である。「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」(四)、これは人生指南の書「論語」に対する反措定の意味あいがある。宗教書ではない人生の実践哲学を説く孔子の言に「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」(「論語」先進第十一)があるが、この前提を覆す設定ではある。編集者の残した記録に次男多加志が、人生の前途を呆然として凝視する姿に憐憫を催す芥川龍之介の姿を記した場面があったが、子供が自分の意思に関係なく生誕する事に唖然とする芥川龍之介を寸描している場面であった。遺伝に就いて取り分け気に病む芥川龍之介に就いては、吉田精一に「こういう遺伝をまず第一にとりあげざるを得なかったのは、自分に伝わっていると信じる悪遺伝を、度を越えて心配した彼自身を的確に語るものであろう。」(「芥川龍之介」三十四)という指摘がある。

狂人に危惧を抱く芥川龍之介は、その反措定として自己の天才に対して確信を抱く。自身の内面の不安、狂気に陥る事を恐れる気持ちは同時に自らの天才主義に結びつく。前掲、吉田精一の説明に拠れば悪遺伝を心配する芥川龍之介は、自身の脆弱さを天才主義に結びつけている。「出産後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつたとか云ふことです。尤もその子供は二月目には死んでしまつたと云ふことですが。」(四)、「芥川龍之介『河童』注解」に拠れば、天才と狂人は表裏一体であるというこの辺の記述に示唆を与えているのは生誕時に「天上天下唯我独尊」と呟いた釈迦の姿であり、ロンブローゾ(「Cesare Lombroso〔一八三六―一九〇九〕イタリアの精神病理学者・犯罪人類学者。『犯罪人論』『天才論』等の著書がある。」)の「天才論」(“Genio e Follia”)に紹介されている「天才と狂人は紙一重」という学説である。

こうした芥川龍之介のある種固定観念は、最後の作品「西方の人」でも再度繰り返されている。常人を善悪の彼岸に導く聖霊をある場合は天才に押し上げ、ある場合は狂人に貶める悪魔的な情念と規定している。「―しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髄の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。」(「西方の人」三)、こうして芥川龍之介流に規定された狂人になるやも知れない天才とは、基督であり自分でもあるという理屈になる。「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず。三日の後殿にて遭ふ。彼教師の中に座し、聴き且問ひゐたり。聞者皆其知恵と其應對とを奇しとせり。」(「ルカ伝」第二章四二―四七)、これは基督が最初に自分が神の子であると自覚した時の挿話である。この引用文の直前に芥川龍之介は決定的な一文を添えた。「クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。」(「続西方の人」八)、イエスが神の子である自覚を持ちその存在を顕示した年齢は、芥川龍之介自身が狂人の実母を見送った年齢に重なる。

「出産後二十六日目・・・・・・」(四)の天才主義の記述の背後には天才の脆弱さを表裏一体で認識する芥川龍之介の視線があるが、ある側面基督と釈迦の渾然一体になった記述でもある。この一文の前半部分は釈迦の言動を後半部分は、基督の人生を背景に置いて記述している。この二人の立場の微妙な違いに就いては、「(それは母胎を離れた後、『唯我独尊』〔インドのカビラ王の子で仏教の開祖釈迦牟尼が、生老病死の四苦を救うため、苦行し悟りを開いたといわれる。生まれてすぐ『天上天下唯我独尊』と人格の尊厳を強調したという伝説がある。〕の獅子吼〔仏が説法によって、悪魔・外道を排撃して正道を宣揚することを、獅子がほえて百獣を恐れさせるような威力にたとえていう語。〕をした佛陀よりもはるかに手よりのないものである。)」(「続西方の人」二)と記述を遺した。

「健全なる男女の河童よ！！！／悪遺伝を撲滅する為に／不健全なる男女の河童と結婚せよ！！！」(「河童」四)(註10)の標語は、後「歯車」(四)の悲しい記述の一文「氣違ひの息子には當り前だ。」(「作者の生まれた年、実母は発狂し、以後狂人となり一〇年後に死んだ。このことが作者に強い不安をもたらし、遺伝による発狂を極度におそれていた。大正五年十一月二八日斉藤茂吉宛書簡には『先夜も往来にて死にし母に出会ひ』と書いている。なお、あとに『なぜ僕の母は発狂したか？』

『発狂することを恐れながら』とある。」）という絶望的な文言になる。

最終的に芥川龍之介は遺書で「畢竟氣違ひの子だつたのであろう。」（「遺書」）という述懐を遺す事になる。「遺伝的義勇隊を募る！！！」（「河童」四）の標語は、さながら欧州留学を経て帰国した森鴎外が日本人の体格の劣悪な事を嘆いて発した言辞のようである。芥川龍之介「河童」の場合は、生存に危機を与える遺伝的な側面があり、森鴎外の言動のように笑いを誘う体のものではなく、切実感と悲壮感さらには絶望的な色彩に彩られたものだ。さらに追加すれば、芥川龍之介を終生苦しめた愛人である人妻秀ひで子は遺伝的には立場を同じくしている。この不思議な暗合がさらに精神的に芥川龍之介を死の淵に追い込んで行った。後年太宰治も同じ負の側面で太田静子と同志的に密かに結びつく奇縁を成している。

5（五）

「五」「六」で扱われているのは、「河童」執筆時の芥川龍之介に取って切実な問題であった幾つかの課題である。第一に家族制度、第二に社会主義、無政府主義といった問題である。「窓の外の往来にはまだ年の若い河童が一匹、両親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐました。」（五）、ここに描かれた若い河童の苦吟する姿が、芥川龍之介のその当時の自画像である。生活打開の為に芥川龍之介は、意識下では家族を放棄する事を模索した。「マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、・・・・・・」（「歯車」五）、さらにより具体的には「河童」執筆直前の芥川龍之介は、馴染みの人妻野々口豊子に窮状を訴えて駆け落ちの相談をしている。そしてこの直後に義兄西川豊の自宅全焼と義兄の鉄道自殺が相次いで芥川龍之介を打ちのめすのである。「河童」脱稿の一週間後に歌舞伎座で芥川龍之介に同席した広津和郎は、この時の芥川龍之介の憔悴振りを記録した。（芥川龍之介）「おお、君、俺はもうやりきれないんだ」（広津和郎）「うん、それもそうかも知れないけれどね。しかしそういうのはわれわれの年齢の義務なんじゃないかな。・・・・・・」というやり取りである。

しかし、最終的に芥川龍之介は数ヵ月後に「（・・・・・・僕はこの養父母に對する『孝行に似たもの』も後悔している。しかしこれも僕にとつてはどうすることも出来なかつたのである。）」（「遺書」）と書いて自殺を遂げるのである。死の直前芥川龍之介は、自分を取り巻く家族構成の一部分を破壊して家長としての意地を見せた。「姉及び異母弟と義絶す」（「遺書」）、しかしこれも生前自己の意思で成し遂げた事ではない。死に至るまで芥川龍之介は、大家族の桎梏から逃れられなかった訣である。ちなみに実姉新原ひさは葛巻義定と結婚し二子を儲ける（義敏、さと子）、後に離婚し西川豊と結婚しさらに二子を産む（瑠璃子、晃）。夫人と三人の子供の将来を見遣った芥川龍之介の配慮は、結局死後に無視され長男芥川龍之介比呂志は後年葛巻瑠璃子と結婚している。異母弟（新原得二）に就いては、森啓祐「芥川龍之介の父」（「桜楓社」昭和四十九年二月）に詳しい。

僕は、学生ラツプの紹介で一般的な河童社会から遊離している詩人トックに紹介される。芥川龍之介が内心で理想とした、家族のしがらみを持たない自由主義者である。彼は自由恋愛の実践者であり、河童社会を超越していて特殊な芸術家集団である超人倶楽部の会員である。僕は、詩人の同伴で超人倶楽部に頻繁に出没してその会員の乱交振りを目撃する。男色行為や泥酔の雌河童の頓死を目撃したりするが、僕と詩人は帰宅後憂鬱に沈むばかりである。ここでは、勤労にしか人生の喜びはないという裏側の意味を読み取る仕組みである。最晩年の芥川龍之介の心境が見られる訣で、「僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いた所を見ると、次第に動物力を失つてゐるであらう。」（「或旧友へ送る手記」昭和二年七月）[註11]の反映である。

河童社会を超越し、一般的な倫理の概念を踏み潰して顧ないはずの超人倶楽部の会員である二人は、平凡な家庭団欒に引き付けられている。「僕は超人的恋愛家だと思つてゐるがね、ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感じるんだよ。」（五）

後年「河童」と同列の作品「人間失格」を遺した太宰治「一つの約束」（新潮社刊「如是我聞」）には、先に引用したアブサント（「absinthe〔仏〕リキュールの一種。フランス、スイスなどに産する緑色の洋酒。ボード

レールなど世紀末の芸術家がよく飲んだ。」）多量飲料により頓死した雌の超人河童の行状や平凡な家庭団欒を羨望する超人倶楽部の二人の溜息の箇所から示唆された描写がある。「難破して、わが身は怒涛に巻き込まれ、海岸にたたきつけられ、必死にしがみついた所は、燈臺の窓際である。やれ、嬉しや、たすけを求めて叫ぼうとして、窓の内を見ると、今しも燈臺守の夫婦と幼き女兒とが、つつましくも仕合せな夕食の最中である。」（「一つの約束」）、家庭の団欒を「助けて！」の無粋な絶叫で壊す事を恐れて遭難者は波にのまれる。太宰治「一つの約束」この場面は、芥川龍之介「河童」（五）の前記の場面から示唆された箇所である。

6（六）

家族問題、男女関係に就いての風刺的な場面の続きである。芥川龍之介が生きた大正時代は、明治の頃から比較すれば風紀の緩んだ時代である。別の視点から観察すれば、個人の自由の重んじられた一時期であった。ある側面女達が、従来の男の認識を飛び越えて行動して芥川龍之介は面喰った訣である。雌河童が、意識して雄河童に追跡させて手練手管を駆使するさまを芥川龍之介は、自分の私生活上の半生を込めてかなり皮肉に描いている。「雌の河童は逃げて行（ゆ）くうちにも、時々わざと立ち止まつて見たり、四（よ）つん這（ば）ひになつたりして見せるのです。」（六）

異性に、とりわけ雄から見た雌の行動は今日から観察すれば陳腐極まりない。偉大なる明治の武の時代、男女禁欲の時代、新国家建設の為に私情を捨てた時代から比較すれば箍の緩んだ時代風潮であった訣だ。第一高等学校、東京帝国大学さらには海軍機関学校就職、そして結婚、作家としての名声の高まりの中途で人生の陥穽が待ち構えていた。淫乱な人妻との不倫関係である。男社会の過当な競争を勝ち抜いてきた一人の秀才に訪れた破滅の予感である。多情な人妻の罠に堕ちた苦痛を芥川龍之介は、すでに「侏儒の言葉」で記述した。「男の女を猟（りょう）するのではない。女の男を猟するのである。」（「『虹霓關（こうげいくわん）』を見て」大正十四年二月）という感想である。

こうした惨憺たる男女間の醜態を目撃して「僕」は、女に無縁な哲学者マツグと学問、芸術あるいは社会一般に就いての意見交換を成す。一人哲学者のみ河童社会の醜聞から超然としているかと思いきや、彼は嘆息して吐息を洩らすのである。「・・・・・・しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい気も起るのですよ。」（六）、ここには男女関係を厭い、その付帯事項として生じる家族関係を嫌悪しながら、それなくして生きられない芥川龍之介の煩悶が、滲み出ている。

芥川龍之介は、この時期単身で独居生活を送る友人小穴隆一の切断した足を撫でながら一人身の気楽さを羨んでいた。さらに懇意な雑誌記者と呆然と佇む次男多加志を眺望して、養育を放棄する旨発言したりしている。松本清張「芥川龍之介の死」（「昭和史発掘」二）には、芥川龍之介の養父である芥川道章（どうしょう）の死が一年早ければ龍之介の死はなかったかと思う、という一文があった。（養父芥川道章は、芥川龍之介の自殺の一年後に亡くなっている。〔昭和三年六月二十七日〕）。芥川文述「追想芥川龍之介」（「筑摩書房」昭和五十年二月）全体には、同趣旨の意味が感じられる。

雌河童の性的攻勢に対して閉口している僕も、さらには哲学者マツグも男社会で生き抜いてきた芥川龍之介の分身の面影がある。雌河童の性的な遊戯の中で耽溺している者には、こうした批判的な言質は為し得ない。性的誘惑で攻勢を賭ける雌河童により人生行路を寸断される知的エリート、旧制高等学校から東京帝国大学の経歴を有する者、男社会で人格を磨いた知的集団は現在では消えてしまった。芥川龍之介と同種類の経歴を有する明治生まれの知的階層、言い換えれば雌河童の性的誘惑で挫折を経るやも知れない特権階層の教授の教えを受けた最後の世代が、私であるかも知れない。芥川龍之介、堀辰雄、中島敦等と親交のあった教授達の授業を聴講した最後の世代である私から鳥瞰すれば、次の世代の教授陣は雌河童との性的遊戯に耽溺することを厭わない人達であった。

雄を求めて果敢に挑戦を繰り返す雌河童を描く「河童」（六）は、一面では実相から離れた理解である。雌河童の容貌の衰えに対して配慮していないからである。あるいは雌河童の性的行動が、時間的な制約を受けている事に芥川龍之介の関心が向いていない事は、残念である。

芥川龍之介運命の女である秀ひで子に就いては、

後日談がある。芥川龍之介自殺の十年後、愛人を師である芥川龍之介から奪った南部修太郎の葬儀（昭和十一年六月二十二日）に列席した彼女を滝井孝作が素描している。「四十ばばあが厚化粧して現れた様は、阿呆の広告の恰好で、又横着者にも見えた。」（「純潔」昭和二十六年一月）、さらには生前芥川龍之介の競争相手であった広津和郎「彼女」（「小説新潮」昭和二十五年三月）は、芥川龍之介没後十年後に、多分南部修太郎の葬儀で再会した折に秀ひで子から旅館に誘われ同宿することを勧誘されながら断って帰宅する挿話である。芥川龍之介より二歳年上であるこの人妻は、この時四十八歳であった。容貌の衰えで芥川龍之介、南部修太郎を凋落させたようにはいかず、広津和郎から軽くいなされ振り払われた訣である。

芥川龍之介は年上の淫乱な人妻に振り回された、弄（もてあそ）ばれた苦痛を「河童」（六）に描写しているが、雌河童秀ひで子の側からすれば容貌と肉体の衰えに対する戦慄から形振（なりふ）り構わず社会的名声のある男達を漁ったと言えるかも知れない。客観的な情勢判断からすれば、雌河童秀ひで子の側には、雄河童である芥川龍之介、南部修太郎程の時間的な余裕がなかったからと同情的な見方も出来る。ちなみに「硫黄（いわう）の粉末（ふんまつ）を顔に塗つた、背（せい）の低い雌（めす）の河童が一匹」（六）と描写されている学生ラツプを梅毒で麻痺させる雌河童は、厚化粧で衆人の前にしゃしゃり出る秀ひで子の姿を戯画化（カリカチュア）したものだ。

戦前の雌河童には、職業が限定されていて雄河童を捕獲する以外に生活の糧を得る事が出来なかった気の毒な事情があった。雌河童に追いかけられる事に人生の意義を見出すには、作者の芥川龍之介は若すぎたと言える。扶養家族を抱えて生活資金を調達することを期待され悩みに悩む知識人を夏目漱石「道草」は、描いた。芥川龍之介もまた師の漱石と同様の悩みを抱えていたが、親戚縁者から限りなく頼られる事を誇りに思い生きがいにするには、夏目漱石も弟子である芥川龍之介も神経において繊細であったと言える。

戦前にあっては、安定した職業に就いた縁者を複数の親戚が経済的に際限なく頼りにするのが一般的であった。夏目漱石も芥川龍之介も職業上言い寄って来る者を平然と拒否した場合に経歴に傷が付く、微妙な社会的な立場にいた。雌河童が、狙いを定めた雄河童を捕獲する為に遮二無二襲い掛かる場面には、社会的に成功した芥川龍之介を標的に制限なく無理強いする経済困窮の周辺の者の行動を写し取った側面がある。

現在でも宗教、学閥、特殊政治集団においては、少数の成功者を狙って経済的、社会的な福利を求めて際限のない物乞い行為が行われている。社会の権力者に一直線に取り込むカトリック教会のザビエル以来の手法を竹山道雄は、実に嫌らしいと感想を洩らした。一般庶民の惨憺たる状況に一瞥も与えず一顧だにしない手法は、現在では庶民政党であるはずの共産党の貴族趣味に受け継がれている。

7（七）

次の課題は、これも芥川龍之介に取って切実な問題であった検閲に就いての状況である。あるいは表現の自由に就いての国家権力介入の実情である。「将軍」（「改造」大正十一年一月）は、伏字だらけで刊行されるも原稿喪失で現在も復元されていない。「将軍」刊行以前にもこの種の問題で痛恨を覚えたらしく、芥川龍之介は北京で胡適と対談の折にこれを話題にしている。（芥川龍之介幻の名作ポルノ小説「赤い帽子の女」は、全編伏字であることである種の劣情に訴える表現上の効果をもたらしているが。）

8（八）

河童国を統括する硝子会社社長ゲエルは、安楽椅子に座り満ち足りた気分で各界の著名人を晩餐に招待して歓談する。「河童」（八）で描写されている国家権力と結託した資本家ゲエル家の晩餐は、ルキノ・ヴィスコンテイの映画「地獄に落ちた勇者ども」に登場する独逸の鉄鋼王、ナチスと結託して富を得るクルップ製鉄財閥の晩餐を思わせるものがある。

ゲエル家の晩餐の話題は、第一に大量生産に拠る規格品の製造に就いてである。第二は、余剰労働者の大量解雇とさらにその処分方法である。解雇された労働者の処分に就いての医者のチヤツクの説明を聞いて僕は、嘔吐を催す。職工屠殺法（しよくこうとさつはふ）により大量処分、さらに遺体は食料にして供給する、という説明である。裁判官のペツプや医者のチヤツク

は、こうした食習慣を必要悪として是認しているようである。哲学者マツグ、河童国の社会基盤を暗黙裡に指導する者は、その合理的な手法に正当性を認めている。医者のチヤツクによれば河童国の同胞相食(あいは)むの食生活の合理的な事に比すれば、人間社会の売春制度などは酸鼻(さんび)の極みである。

これなどは後年の各国の文化摩擦の先例をなすものだ。百年前に鯨の大量処分を行い、激減に貢献した米国は、今では日本の伝統的な食習慣に意義を唱えている。「河童」(八)で問題なのは、職工屠殺法(しよくこうとさつはう)による同胞の処分と食肉の習慣である。人間社会から河童国に来た僕には衝撃でも、医者のチヤツクには合法的かつ合理的な食生活である。芥川龍之介は、後年欧州独逸で戦時下合法的に行われた非人道的な大量殺人の予見を何によって成したのであろうか。一般的な日本人にとっては、驚愕と酸鼻の政治的な悲劇の予兆を何によって成したか。これに就いては、今日この予兆、予言的な言辞の根拠の拠るところが「聖書」の精読の結果であると断定してよい。

イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」(「山本書店」昭和四十五年五月)は、当時の平和呆けの日本人に衝撃を与えた。ここでの主張は長年の「聖書」の研究成果であり、その成果は山本七平のそれである事は今日確認されている。米を主食とする日本人にとって酸鼻の極みであるユダヤ人の大量殺人とその遺体の活用は、羊を食用としている独逸人には違和感がなかったという指摘である。

9(九)

僕は硝子(ガラス)会社の社長のゲエルに不思議にも好意を持つてゐました。ゲエルは資本家中の資本家です。(八)

ここで問題にされているのは独占資本主義の存在である。芥川龍之介「河童」における独占資本主義は、以下のような構造である。現在の河童国の政権は、「河童全体の利益」を政権綱領に掲げる政党「Quorax(クオラックス)党」(「おや？党」)である。この政党の党首は、有名な政治家ロツペでその主張は、ビスマルク(「Bismarck」)の唱えたスローガンと同じく「正直は最良の外交である」と言うものである。政治家ロツペを支配し指導しているのは、「Pou-Fou(プウ　フウ)新聞」(「ああ？新聞」)社長のクイクイである。こうして新聞社主を支配することで前掲、硝子(ガラス)会社社長のゲエルは、最終的に河童国を支配し統治して独裁者として君臨している。ここまでだと図式化された共産党員の糾弾する独占資本主義社会であるが、芥川龍之介は最後に軽いユーモアで河童国支配の構図を締めくくる。河童国に独裁的な権力を行使して君臨し続けるゲエルもやはり支配されている、彼自身の説明に拠ればゲエルは夫人の統制を受けている。

独占的な資本主義国の定番で河童国も宿命として戦争に訴えざるを得ない。ここで展開されているのは、資本主義国家が生存の為に宿命的に戦争に訴えざるを得ないという図式化された共産主義理論である。河童国の戦争理論は、哲学者マツグの「汝(なんぢ)の悪は汝自(みづか)ら言へ。悪はおのづから消滅(せうめつ)すべし。」という宣言である。ゲエルに拠れば、河童国の戦争遂行の理由は河童国の利益以外に彼自身の愛国心から発せられた熱情である。芥川龍之介の説明に拠ると「(何しろ河童の強敵に獺のゐるなどと云ふことは『水虎考略(すゐこかうりやく)』の著者は勿論、『山島民譚集(さんたうみんたんしふ)』の著者柳田国男(やなぎだくにを)さんさへ知らずにゐたらしい新事実ですから。)」という事である。つまりは、河童の仮想敵に獺を対峙させて見せたのは自分の独創だと芥川龍之介は、ここで言っている訣である。河童国の独裁者ゲエル(「Guerre」)とは、「戦争」の意だそうである。(その巨大な支配者の名前は≪Guerre)、つまりフランス語の≪戦争≫である)という説明が、久保田正文「『河童』と『機関車を見ながら』と」(「芥川龍之介」洋々社)にある。

10(十)

ここで第一に話題になっているのは、僕が河童世界で生きる為にとりわけ世話になっている学生ラツプの家族間の内輪喧嘩である。学生ラツプは、家族の軋轢で煩悶し、自由に生きる詩人トツクの生活を羨みながらそれでも生活の為に日頃厭う家族を捨てられないでいる。学生ラツプは、「おや虫取り菫(すみれ)が咲いた。」という何気ない独り言で妹の機嫌を損ない、さらに妹の加勢をする母親の顰蹙を買う。この家族喧嘩が原因で母親と叔母が対立し、父親も機嫌を損ねさらに弟は金を持って家を飛び出してしまう。一家の惨状に学生ラツプは泣き崩れてしまう。「ラツプは両手を顔に埋(うづ)め、何も言は

ずに泣いてしまひました。」、これは田端の養家芥川家の実情の反映である。(注12)

第二に問題になっているのは、自作に関する批評家の意見に対する芥川龍之介の態度である。僕は、学生ラツプ同伴で音楽家であるクラバツクを訪問する。音楽家クラバツクは資本家ゲエルとは別の意味で優雅な時間を楽しんでいる。骨董を収集し、子供と平穏な生活を送るクラバツクは、ある側面で室生犀星の面影がある。しかし、自作に対する批評に敵意を燃やす箇所は、芥川龍之介のそれである。

同業者であるロツクを恐れるクラバツクは、僕の賞賛「ロツクも天才には違ひない。しかしロツクの音楽は君の音楽に溢(あふ)れてゐる近代的情熱を持つてゐない。」にも関わらず、同調しない。クラバツクがロツクに及ばないのは、自分がいつしかロツクの芸術の影響を無意識裡に受けてしまうからである。この関係は、志賀直哉に対する芥川龍之介の側からの苛立ちの表明である。クラバツクを擁護する学生ラツプに対して自分は、誰よりも敵対するロツクの能力を知っている。ロツクを取り巻く亜流には、彼の真の芸術的な才能を感知し得てない。これは龍門の四天王から離脱して志賀直哉門下に鞍替えした滝井孝作を含む人々に対する芥川龍之介の忌憚の無い意見である。(注13)

クラバツクを訪問する詩人トツクの行く手を阻止した僕は、二人の芸術家同士の抗争を未然に防いだつもりが、肝心のトツクは幻覚症状を呈している。「何あの自動車の窓の中から緑いろの猿(さる)が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」精神の変調を来たした詩人トツクを見守る学生ラツプも既に常軌を逸している。詩人トツクを見守る学生ラツプの関係は、宇野浩二の発狂を凝視する芥川龍之介の等身大の姿の反映である。

11（十一）

哲学者マツグ「阿呆(あはう)の言葉」は、芥川龍之介「侏儒の言葉」を書き続けつつある芥川龍之介の等身大の反映である。(注14)「河童」（十一）に羅列されている断章は全部で十五章であるが、執筆者である哲学者マツグは、以下のような紹介をされている。「―僕等の知らない何ものかは僕を、―クラバツクを嘲(あざけ)る為にロツクを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマツグはかう云ふことを何も彼(か)も承知してゐる。」（十）、これから判断するに哲学者マツグ「阿呆(あはう)の言葉」とは、その断章は夜郎自大になりやすい芸術家の存在を脅かすものでなくてはならない。

①「阿呆(あはう)はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。」（「侏儒の言葉」阿呆）、これは表面的には自己の存在を絶対化して、他者を見くびる者に対する警告である。しかし、懐疑主義者である芥川龍之介の箴言として読む場合は、それでは誤りである。基督教や共産党は本来個人が持っている人格を否定し、自我を捨てる事で教条主義に拠る人格完成を目的としている。絶対的な宗教や赤化思想で武装して、他者を虫けらのように眺望して疑念を抱くことのないお目出度い人種を揶揄、嘲笑した警句であろう。

②「我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬(しつと)したりしない為もないことはない。」（「侏儒の言葉」自然）、年少にして高廈(こうか)に登った芥川龍之介を苦しめた最大のものは、先輩や同輩、あるいは後輩からの嫉妬でありやっかみである。大阪毎日新聞連載小説「素戔嗚尊」を後に作品集「春服」収録に際して前半部を捨て、後半部分のみを独立させて「老いたる素戔嗚尊」としたのは、作品内部の主題が芥川龍之介自身の文壇登場当時の朋輩からの嫉妬を主題に据えているからである。東京下町の人情味溢れた世界に育った芥川龍之介は、自己の生活空間を切り捨てる事が最後まで出来なかった。芥川龍之介の敗北を身近に目撃した堀辰雄、谷崎潤一郎等は果敢に自己の生存圏を捨てて新生活を別空間に営んだ。

芥川龍之介没後、佐藤春夫は友人を自殺に追い込んだ東京での文壇社交の世界を生きたが、「門弟三千人」の処世術を可能にしたのは彼が本来田舎者であったからである。

③「最も賢い生活は一時代の習慣(しふくわん)を軽蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである。」（「侏儒の言葉」處世術）、「論語」にも社稷(しやしよく)を急激に激変させることはよくないという言辞があった。謂うならば中庸の精神を尊ぶ教訓であるが、現実の芥川龍之介はそうした人生を生きる事は叶わなかった。ゲーテに憧憬を抱きながら挫折の人生を生きた基督に共感を示して、自身の切り裂かれる内面を「西方の人」の内部に定着

させた。「西方の人」(三十六「クリストの一生」)は、中庸に生きられなかった芥川龍之介の最期の吐息である。「人生を幸福にする為には、日常の些事を愛さなければならぬ。」(「侏儒の言葉」些事)も同様な箴言である。

④「我々の最も誇りたいものは我々の持つてゐないものだけである。」(「侏儒の言葉」矜持)、芥川龍之介「侏儒の言葉」はフランス「エピクロスの園」の剽窃の側面があることは夙に指摘されている。しかし、「河童」(十一)の箴言のすべては「エピクロスの園」にはない断章である。ということは、即興的に執筆された「河童」にあってこれらの箴言は、芥川龍之介独自のものであった。言い換えれば作者の創作行為に付随した切実な断章のみ咄嗟に脳裏に浮び記述したと言える。「河童は近年にない速力で書いた。」(「滝井孝作宛書簡」昭和二年二月二十七日)という記録がある。

「このやうに我々人間の最も熱心に求めるものは最も我々に不足したものである。」(「思ふままに」大正十二年六月)という同趣旨の一文がある。「思ふままに」(「時事新報」大正十二年六月八日)の本文を一読すると、その趣旨は以下のようなものである。「所謂真面目なる小説家、戯曲家等に真面目さの缺けてゐることは論理の澄するところにより疑ふ餘地のない事実である。」(「思ふままに」)、この一文の後には当世一代の求道作家である倉田百三「出家とその弟子」「俊寛」「布施太子の入山」等を机上に載せてその真価について疑念を呈したものである。同一の作風、主題を内包していながら武者小路実篤に胡散臭さがない、と言っている。すると「侏儒の言葉」(矜持)の同文の一節の続きである「實例―Tは独逸語に堪能だつた。が、彼の机上にあるのはいつも英語の本ばかりだつた。」は、芥川龍之介の実体験でなければならない。

当代きっての求道派作家倉田百三を親愛なる武者小路実篤を対比させることで誹謗した、芥川龍之介の念頭にあった「独逸語に堪能」な者と言えば、第一高等学校入学時に一時期親交を持ちながら互いの圭角の為に別れた佐野文夫の存在が、念頭にあった筈である。「侏儒の言葉」(矜持)の断章は、第一高等学校の寄宿舎で芥川龍之介自身が親交のあった佐野文夫の机上で目撃した実体験である。

⑤「何びとも偶像を破壊することに異存を持つてゐるものはない。同時に又何びとも偶像になることに異存を持つてゐるものはない。しかし偶像の台座の上に安んじて座つてゐられるものは最も神々に恵まれたもの、―阿呆か、悪人か、英雄かである。(クラバツクはこの章の上へ爪の痕をつけてゐました。)「侏儒の言葉」(偶像)、哲学者マツグ「阿呆の言葉」のこの断章に音楽家クラバツクは、熟読の痕跡を残した。偉大なる明治の時代以降に人生を生きた芥川龍之介にとっては、前時代否定の精神が抜きがたいものであった事が分かる。自作「将軍」末尾で自決直前に正装の軍服姿で記念写真を撮影した乃木将軍を批判している。「支那游記」(「江南游記」八)では、異民族金に積極的な抵抗をした救国の英雄岳飛の墓(「宋岳鄂王之墓」)は、偶像として賛美されている。敵役の秦檜の像は排跪さられて罵声を浴び、群集の嘲笑を受けている。圧倒的な軍事的な攻勢から譲歩により、南宋に一時であるが繁栄を齎した老練な政治家は、民衆の敵役を死後も演じなければならない。戦時下百万の日本陸軍の侵攻を受けて、「一面抵抗、一面交渉」の精神で日本占領地での民生の安定に貢献した汪兆銘は、戦後南京政府の跡地である梅花山に跪像として跪かされている。こうした前提で芥川龍之介は、「一体民衆と云ふものは、単純なものしか理解しない。支那でも関羽とか岳飛とか、衆望を集めてゐる英雄は、皆単純な人間である。」(「江南游記」八)という感想を綴っている。「芥川の『将軍』その他、ほとんどあらゆる作品に見られる英雄否定、美談否定は、思想といふより趣味の問題で、当時の浅薄な時代思潮の反映である。」という三島由紀夫「『南京の基督』解説」は、こうした芥川龍之介の偶像破壊の筆致を時代風潮の故であるとしている。

⑥「我々の生活に必要な思想は三千年前に尽きたかも知れない。我々は唯古い薪に新らしい炎を加へるだけであらう。」、この種の嘆きは現在も自然科学の分野の研究者が頻繁に口にする言辞の一つである。我々は先人の刈り入れをした後の畑で落穂拾いをしている一人に過ぎない。創作する者でも芥川龍之介のように書斎で終日過ごす者は、悉くこの種の感情に襲われるらしい。「時々自分のすべての思想すべての感情は 悉 とうの昔に他人が云ひつくしてしまつたやうな氣がする」(「井川恭宛書簡」大正三年三月十九日)、後年芥川龍之介

は、独創の困難である事に言及している。この前提で前人未到の分野を踏み出す者は、多くは先人の業績を破壊しているに過ぎない。「大抵彼等の叛逆は前人よりも前人の追従者に對する叛逆である。」（「文藝的な、余りに文藝的な」三十九）と言うのが、「現代日本文学全集」（「改造社」大正十五年十一月）「明治大正文学全集」（「春陽堂」昭和二年―）「明治大正名作展覧会」（「美術展覧会」昭和二年―）等の一連の文化業績に接した芥川龍之介の素朴な感想である。

「河童」（十一）の全十五章の断片の内で⑥は、後半の一文は「西方の人」（十九）に採録されている。この場合は「新約聖書」と呼ばれる創作作品の原作者である基督の人生を説明した文章である。前後の文脈から判断するのに「新約聖書」の著者である基督が、その知識基盤を「旧約聖書」に拠ることを説明しているのである。以上から推測するのに同時期執筆「河童」（十一）の断章⑥の一文、三千年前に尽きたかも知れない「我々の生活に必要な思想」として芥川龍之介の脳裏にあったのは「旧約聖書」の事跡である事が憶測される。

⑦「我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としてゐる。」（「侏儒の言葉」無意識）、この断片も芥川龍之介の天才主義に拠る一文である。創作上の傑作は、著者の意識の敷居を越えた闇の世界にあるという神秘主義に傾いた最晩年の芥川龍之介は、こうした自身の不安を基督に仮託して描いた。自己の天才主義が安易に狂気に結びつくという不安であるが、天才的創造行為が無意識裡に成される時に狂気も創造的な世界に忍び込む。「河童」（十一）の⑦の断章も同文の「侏儒の言葉」（無意識）も簡潔な断片で意味を掌握できないが、「闇中問答（遺書）」（「文藝春秋」昭和二年九月）に芥川龍之介による説明文がある。「僕の意識してゐるのは僕の魂の一部分だけである。僕の意識してゐない部分は、―僕の魂のアフリカはどこまでも茫々と廣がつてゐる。僕はそれを恐れてゐるのだ。光の中には怪物は棲まない。しかし無邊の闇の中には何かがまだ眠つてゐる。」（「闇中問答」三）、理性で制御出来ない精神の暗部が、創造的な行為に走らせている。この創作の源泉は、狂気の淵に自分を誘うやも知れないという神秘的な傾向である。理性で制御できない闇の世界の衝動を「同時に又彼自身の中の豫言者は、―或は彼を生んだ聖霊はおのづから彼を翻弄し出した。」（「西方の人」二十七）。

芥川龍之介は、創作衝動を成す精神の闇の持つ神秘的な動きを半ば恐れそして自負している。天才のみ持ち得る創作衝動は、狂気に陥らせるかも知れない事を口述している。「新潟での座談会」（「昭和二年五月二十三日」）、宿舎である篠田旅館で心理学者式場隆三郎の発言「・・・・・・頭のいゝ人や想像力の豊かな人ほど大きいと云つてゐる人があるのですがね。」に対して芥川龍之介の飛躍した発言がその場をしらけさせている。「さうでせうなあ。精神病者は最も進んだ人間だと云つていゝですね。」（皆な暫く沈黙。）

後進の太宰治も創作に賭ける自分の精神の内部に理性で把握し得ない不気味なものが存在すると言っている。言葉は違うが、神秘主義に傾斜して行った最晩年の芥川龍之介と同じ思いに囚われていた。「私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かかれてゐる。その文字は、何であるか、私にもはつきり讀めない。」（父）、自動車の窓に「緑いろの猿」を幻視する詩人トツクは「河童」（十三）で精神の闇を制御出来ずに自殺してしまう。

（註１）「槍ケ嶽紀行」（吉田精一脚注「大正九年六月槍ケ嶽に旅行した際の記事。」）に就いては、早くに葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」（「槍ヶ岳紀行」）の編者の解説で「槍ヶ嶽紀行」（「改造」大正九年七月）の掲載事項から類推した誤りであると指摘されてきた。葛巻義敏註「（この年の夏、彼は宮城県の青根温泉に八月初めから、約二十日程滞在して、当時の高木卓、武藤智雄氏等の同人雑誌『意識』の同人諸氏と同宿、交際している。―）」同人雑誌「意識」創刊の仲間高木卓（本名安藤熙）、小暮亮（本名管藤高徳）等との交流、小暮亮にはこの時の芥川龍之介との交際が、記録されている。「河童」の素材の有力な一つは柳田国男「遠野物語」であるが、見知らぬ東北での一ヶ月の長期滞在が民俗学方面の知識を実見させた事が推測される。

芥川龍之介は日本十大昔話の中で「かちかち山」「猿蟹合戦」「桃太郎」を掌編にして創作している。「かちかち山」は、後年の「教訓談」の草稿である。（「普及版芥川龍之介全集」）。「かちかち山」（「大正八年頃」元版芥川龍之介全集）とあるので「教訓談」（「現代」大正十二年一月）は、三年後に草稿から完成を見たのである。芥川

龍之介が日本十大昔話の内で「かちかち山」に興味を持った理由は、完全稿「教訓談」に明記されている。「あなたはこんな話を聞いたことがありますか？人間が人間の肉を食つた話を。」「狸を亡すのは兎です。やはり一匹の獣です。この位意味の深い話があるでせうか？」(「教訓談」)。昔話「かちかち山」を一個の教訓談として読み取る事である種荘厳な気に打たれると芥川龍之介は、感想を述べている。

「婆さんを殺した古狸はその婆さんに化けた上狸の肉を食はせる代りに婆さんの肉を食はせたのです。」(「教訓談」)、昔話の中のこの一挿話は芥川龍之介に取っては衝撃的であったらしくて後年「河童」(「八」)でこの問題を話題にしている。「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。・・・・・・」「つまり餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯を嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」、この発言は後年戦時下の独逸で実行された異民族殲滅の予言的な言辞である。人間社会の視点で河童世界を垣間見ると異様な風習も一つの慣習である。河童の食生活に対して眉を顰める人間に対して、河童から垣間見た人間社会の残酷な側面を指摘する。「・・・・・・あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になつてゐるではありませんか？職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。」

支那では古来人肉の風習が存在したし、鯨を食する日本人の生活習慣は近年欧米の非難を浴びている。異国での食生活の違和感、文化摩擦は今日でも絶えないし、生活習慣の相違に就いてはその実例は無数である。欧米文化の視点で日本社会を批判したベネディクト「菊と刀」(「The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture」)を荒唐無稽と証した竹山道雄は最晩年鎖国を再評価し、人的な無制限の交流に対して異議を唱えている。世界を制覇した大英帝国は、凋落して今や他民族国家として民族内部の苦痛で煩悶している現状がある訣である。琉球国に半生を生きる私は、東京の学会で貴公子、プリンスと称される高貴な学識者を何人も当地に招聘した経験があるが、彼等の振る舞いはことごとく支那大陸に乱入した日本陸軍兵士と変らない。琉球国に半生を生きた私は、生活実感として異なる歴史を持った国の統一は無理であるという実感を持っている。大東亜戦争敗北で台湾、朝鮮、満州を喪失した事は、民族的な僥倖であったという意見を持っているが、これは私の生活実感から得た個人的な感想である。

(註２)「出て行け！この悪党めが！貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、虫の善い動物なんだらう。出て行け！この悪党めが！」(「河童」序)、一度河童世界の住民として生活をした者の人間世界を全面拒絶したこの言葉は、芥川龍之介の遺言として残された者に甚大な影響を与えた。谷崎潤一郎は煩雑な東京での文壇生活を捨て、最終的には時局に背を向ける形で古典世界に耽溺して芥川龍之介流の生活を捨てた。谷崎潤一郎が関西移住により日本にいながら海外移住のように身を処したのに対して、弟子の堀辰雄は軽井沢に移住し、そこを擬似欧州に見立てて思索と著述により芥川龍之介が生きて彼を疲労困憊させた東京での生活を捨てた。友人芥川龍之介の敗北を身近に目撃した佐藤春夫は、友人を破滅に導いた東京での文壇生活を積極的に生きる事で身を処した。「門弟三千人」の生き方は、処世術としては「毒を食らわば皿まで」「毒を以て毒を制す」生き方である。

芥川龍之介没後、改造社主催の懸賞に応募して第一席になった宮本顕治「敗北の文学—芥川龍之介氏の文学について—」(「改造」昭和四年八月)は、階級闘争で芥川龍之介流の煩悶を乗り越える事は可能だという唯物史観を展開したものだ。この教祖の宣託は以後半世紀に亘り日本人の精神を拘束し、脅迫し、従属への道を開いた。党の規律により精神の空洞を閉鎖し、森羅万象を善悪二元論で識別し、自己の統制された精神にのみ正義があり他は殲滅すべき悪の巣窟という理論は、現在は死滅したが形骸化した二元論は、日本人の精神史に深い痕跡、傷痕を残した。一元的に統制された党の規制は消滅したが、日本社会に無数の党組織は残存し、現在の日本社会に無数の秘密結社を生んだ。少数の仲間内で悪を容認し、他者に対して無制限の攻撃を加える形態は残存した。精神を外部からの統制で制御できなくなった憐れな放浪する魂を太宰治は、「私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱい書かれてゐる。その文字は何であるか、私にもはつきり讀めない。」(「父」昭和二十二年四月)と表現した。こうして精神の空洞を埋める為に、統制を喪失して虚無に流される自己を支える為に「父」(「私」)は、命懸けで放蕩三昧に耽るのである。精神と肉体を駆使した飲酒行為を「義」の為の闘いであると公言する。共産党の統制から離脱し、基督の福音によっても心の空虚を埋め

られなかった者の憐れな末路を太宰治「父」（「人間」）は、率直に表現している。

三島由紀夫は東大駒場教養楽学部での全共闘学生との討論会（「昭和四十四年五月十二日」）に参加し、君たちが天皇を戴いてくれれば協調してもよいと発言した。日本共産党を押さえ込む強大なうねりは現在の大学において消滅し、民青の組織力こそ真に恐るべきものであると警告した三島由紀夫の予言は適中した。「我々はいかなる時も、芥川氏の文学を批判し切る野蛮な情熱を持たねばならない。（中略）『敗北』の文学を―そしてその階級的土壌を我々は踏み越えて往かなければならない。」（「敗北の文学―芥川龍之介氏の文学につて―」）という教祖の宣託は現在も日本の大学では強固な基盤を持っている。私個人は、大学人の一人として時間の彼方に消えて行った多くの全共闘諸氏の横顔に愛惜の念を抱いている。

芥川龍之介自身は、河童国から帰還した自己を東京市外の精神病院に収監された精神病院患者に擬した時に一般社会との同調を拒否した。「出て行け！この悪党めが！・・・・・・」と叫び声を上げる前にいくつか局面打開の方策を講じた。第一に考えたのは国外脱出、すなわち現状離脱である。「若し僕の神経さへ常人のやうに丈夫になれば、―けれども僕はその為にはどこかへ行かなければならなかつた。マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、・・・・・・」（「歯車」五）、事実佐藤春夫の後援者が欧州旅行の資金援助を申し出た時に芥川龍之介は、同伴する意向を見せた。佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」（「改造」昭和三年七月）の記述に拠れば、その地は「露西亜（ロシア）を通つて仏蘭西（フランス）からスペインや伊太利（イタリー）の方を通りエジプトから土耳古（トルコ）近東の諸国若し出来るならペルシア」である。

こうした企ては結局芥川龍之介の方の立場から水泡に帰すが、その家庭的な事情に就いて芥川龍之介は象徴的に説明、記述している。「マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、―僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑しない訣には行かなかつた。同時に又復讐の神に追はれたオレステス（「Orestesギリシア神話中の人物。母〔クリュタイメストラ〕が情夫と共謀して父〔アガメムノン〕を殺した時、姉〔エレクトラ〕の助けでひそかにのがれ、成人して姉とふたりで父のあだを討ったが、親殺しという罪悪行為を犯したので復讐の女神たち〔エウメニデス〕によって気違いにされ、追いまわされた。」）を考へない訣にも行かなかつた。」（「歯車」五）、つまりは芥川龍之介の海外逃亡の企てを無に帰させたのは家庭の事情、愛人関係と実母との関係を断ち切れぬ心理的な拘束意識である。

「出て行け！この悪党めが！・・・・・・」（「河童」序）の芥川龍之介の叫びは、後年太宰治「人間失格」に受け継がれた。この世を気違い病院であるという認識で二人は自殺して果てたが、救済の道は具体的に提示されていた。二つの世界を行き来して世を過ごすことで精神の均衡を保つことである。マン「魔の山」冒頭には日常の不健康は、生活を捨て異国に旅立つ事で救済の道が開けるという教養小説特有の教訓的な一文が添えられている。

（註３）「Ｓ精神病院」は、明瞭に後出「Ｓ博士」との関連で斉藤茂吉の青山病院を想定している。羽鳥徹哉「芥川龍之介『河童』注解（「勉誠出版」平成十九年六月）に拠れば、巣鴨精神病院は、戦後大川周明を召還した松沢病院の前身である。青山病院の方は火災で焼失して同地にはその後青山病院分院として再建。この辺の事情に就いては、北杜夫「楡家の人々」（「新潮社」昭和三十九年四月）に詳しい。（以下、羽鳥徹哉「芥川龍之介『河童』注解」を適宜参照する）。巣鴨精神病院に就いては、吉田精一脚注に「芥川は小説を書くためここを見学した。」とあるが何に依拠した説明であろうか。本文中に記述したように「河童」の作中人物は狂気に陥り精神病院に隔離された自身の自画像を芥川龍之介自らが仮構した作品である。しかし、この虚構の人物の宿命をなぞる形で友人宇野浩二が、精神病院に収監される事態が勃発し、芥川龍之介の自殺を誘発し最終的な決断に影響した。「河童」脱稿（「昭和二年二月十三日」）から四ヵ月後に宇野浩二の発狂を目撃する。宇野浩二の世話をする友人広津和郎共に入院等の世話を焼くが以下の記述事項は、広津和郎「あの時代」（「群像」昭和二十五年一月、二月）による。当時本郷菊富士ホテルを仕事場に同じくしていた宇野浩二と広津和郎の両名は、前者は上野桜木町に居住し、後者は大森馬込住まいである。宇野浩二の細君から友人広津和郎に夫の精神変調を知らされ（「昭和二年六月一日」）、広津和郎が青山病院分室に斉藤茂吉を訪問（「昭和二年六月初夏の二日」）し「爽かな天気」（「あの時代」）の青山脳病院の中庭で斉藤茂吉との面談を待っていると芥川龍之介が、宇野浩二の件で来訪し二人は数日親密な親交を持つ。

この日芥川龍之介は、広津和郎のタクシーを返し斉

藤茂吉と広津和郎の両名を同伴して上野桜木町の宇野浩二の自宅を訪問した。診察後斉藤茂吉の方は、帰宅するも二人はその後逢初橋まで歩く。六月三日、四日の二日間二人は宇野浩二の自宅で面談している。その後宇野浩二は、斉藤茂吉の世話で王子の小峰脳病院に入院させられるが、この日芥川龍之介と広津和郎、それに宇野浩二の友人画家Ｙ・Ｎ（「この人物は、江口渙『わが文学半世紀』の記述を参考にすると『青衣の女』の作者晃甫広島新太郎の可能性がある。」）は、亀戸（かめいど）の色町を散策している。「僕はゆうべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ『生きる為に生きるてゐる』我々人間の哀れさを感じた。」（「或旧友へ送る手記」）の記載内容は広津和郎に拠ればこの日、宇野浩二を王子の脳病院に斉藤茂吉の先導で入院させた夜の出来事である。「僕のしみじみした心もちになつてマインレンデルを讀んだのもこの間（あいだ）である。」（「或旧友へ送る手記」）の「マンレンデル」の出所は、メチェニコフ「人生論」（「文明協会」明治四十一年頃）であるという。

広津和郎は芥川龍之介と三士会で面識を得ていた。（三士会は、前掲江口渙の説明に拠れば大正九年頃の芥川龍之介を中心とした集まりで毎月第三土曜日定例日としていた。顔ぶれは、芥川龍之介、江口渙、菊池寛、久米正雄、佐佐木茂索、小島政二郎、南部修太郎、宇野浩二、広津和郎、秀しげ子、大橋房子という人物配置である。）しかし、初めて親しく会話したのは鎌倉駅前で芥川龍之介に「君は夜起きていて昼寝るんだってね。―それじゃ何時細君と寝るんだい」と声を掛けられた時である。この時の芥川龍之介の発言は、確実に広津和郎を介して志賀直哉に伝わっている。「芥川君は一人々々で會つてゐると音無しいが、側に三四人ゐるとよくさういふ調子でものをいふと聞いてゐた。」（「沓掛にて―芥川君のこと―」）という回想が芥川龍之介没後遺される。

「点鬼簿」（「改造」大正十五年十月）に対して徳田秋声「十月の作品」（「時事新報」大正十五年十月）が、近松秋江「旧痕」に比して見劣りするという感想を寄せた事に対して広津和郎「文藝雑観」（「報知新聞」大正十五年十月）で芥川龍之介「点鬼簿」評価の一文を寄せた。これに対する芥川龍之介の感謝の書簡が全集に載っている。「この手紙は簡単だが（又君に手紙を書くには始めてかと思ふが）書かずにゐられぬ氣で書いたものだ」（「広津和郎宛書簡」大正十五年十月十七日）。広津和郎に拠れば、芥川龍之介からの書簡は以前に一度貰っているそうであるが、これは全集に収録されず芥川龍之介自身も忘れていた事が分かる。

この数日後に宇野浩二は斉藤茂吉同伴で王子の小峰脳病院に入院する。この日上野桜木町の宇野浩二の自宅で落合った芥川龍之介、広津和郎、画家のＹ・Ｎの三人は上野公園を散策するが、この時の芥川龍之介の発言は一ヵ月後の自殺の複線である。「しかし芸術家の一生として立派なものだと思うね」「もしあのままになったとしても立派だよ。発狂は芸術家に取って恥じゃないからね。―宇野もあれで行くところまで行ったという気がするよ」（「あの時代」五）、この日の三人の行動の内亀戸の遊郭での見聞は、「或旧友へ送る手記」に採取された。さらに一連の宇野浩二発狂の経過は、「或阿呆の一生」（「五十」）前半に記述された。

彼の友だちの一人（「宇野浩二〔一八九―――一九六一〕をさす。小説家。晩年に『芥川龍之介』の著がある。」）は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、一軽快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしみてわかる為だつた。彼はこの友だちの発狂した後、二三度この友だちを訪問した。「君や僕は悪鬼（あっき）につかれてゐるんだね。世紀末（せいきまつ）（「十九世紀末ヨーロッパにおける懐疑的・退廃的・耽美的文芸思潮をいう。」）の悪鬼と云ふやつにねえ。」この友だちは聲をひそめながら、こんなことを彼に話したりした。が、それから二三日後（ご）には或温泉宿へ出かける途中、薔薇（ばら）の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコツタ（「terracotta(英語)。粘土を焼いて作った堅い土器類。各種の細工物に用いる。」）それはこの友達の愛した「検察官（けんさつかん）」（「ゴーゴリの戯曲。一八三六年上演。社会風刺喜劇の傑作。腐敗しきった町にふらりと舞いこんだ大ほら吹きのフレスタコフを、尾行（びこう）の検察官と勘違いしたことからおこる狼狽を、するどい筆法で描いている。」）の作者の半身像だつた。彼はゴオゴリイ（「Gogol〔一八〇九―五二〕ロシアの小説家。長編『死せる魂』を執筆中に狂死した。」）も狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた。

芥川龍之介の愛した宇野浩二の性格等に就いては、広津和郎「同時代の作家たち」（「あの時代―芥川と宇野―」「『蔵の中』物語―宇野浩二の処女作―」）が参考になる。芥川龍之介の宇野浩二宅訪問は、昭和二年六

月三日、四日さらに数日置いた入院の日で合計三回である。宇野浩二入院の当日上野公園を散策中に聞いた友人の画家Ｙ・Ｎからの話、小田原の旅館で宇野浩二が床の間の薔薇の花を食べた話を挿入している。芥川龍之介が、宇野浩二に贈呈したゴウゴリイの半身像に就いての回想は、後年宇野浩二「芥川龍之介」に詳細に語られている。

いずれにしても身近な友人の発狂現場に立ち会った事が、一ヵ月後の芥川龍之介自殺決行の重大な引き金になった。狂気になって精神病院に収容されて醜態を晒すよりも死の平安に飛び込んでしまうというのが、芥川龍之介に残された最後の矜持であった訣である。幼児に実見した実母の廃人としての日常とさらに身近に目撃した宇野浩二の醜態が、一ヵ月後田端の自宅で深夜一人青酸カリを仰ぐ芥川龍之介の勇気を奮い立たせたと言える。芥川龍之介が歌舞伎座で旧知の広津和郎の顔を見て「おお、君、俺はもうやりきれないんだ」（「あの時代」一）と嘆いたのは「昭和二年の二月か三月で、『点鬼簿』を雑誌で読んでから六、七ケ月経った頃であった」と広津和郎は記録しているが、宮坂覚篇年譜に拠れば二月十九日である。この日休憩室で久米正雄と雑談、夜は里見弴と吉原の茶屋さらに深夜佐藤春夫、佐佐木茂索と大橋房子夫妻と帝国ホテルへ行き、そこで谷崎潤一郎、久米正雄、佐藤春夫と深夜まで話しこむ。谷崎潤一郎、佐藤春夫にはこの日帝国ホテルでの文学談を含めて芥川龍之介最後の数ヶ月の言動の記録が残されている。

（註４）「河童」執筆時作者の意識にあったのは、スウィフト「ガリバー旅行記」(Jonathan Swift「Gulliver's Travels」である。芥川龍之介が個人的な興味を持ったのは、眩暈と難聴に苦しみ廃人として後半生を生きた自画像である。最初にスウィフトのこの挿話が登場するのは「侏儒の言葉」（「人間らしさ」）においてである。

スウィフトは発狂する少し前に、梢だけ枯れた木を見ながら、「おれはあの木とよく似てゐる。頭から先に参るのだ」と呟いたことがあるさうである。この逸話（「一七一七年、ダブリン郊外を散歩した時、エルムの老木の枯れ切った大枝をさし、『あの樹、あれがきっとぼくだ。頭の方から死んで行くのだ』とつぶやいたという。」）は思ひ出す度にいつも戦慄を傳へずには置かない。わたしはスウィフトほど頭の好い一代の鬼才に生まれなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。

「侏儒の言葉」（「文藝春秋」大正十二年十一月―十四年十一月）の比較的初期にスウィフトの挿話は登場している。この挿話が次に再登場したのが、「（鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない樫の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。）」という「河童」（「序」）の一文である。この場面は、明らかにスウィフトの晩年の一挿話を借りて来た箇所で「河童」の主人公、「或精神病院の患者、一第二十三号」を廃人として生きたスウィフトに擬えた場面である。

「河童」の主人公は、精神的な破綻を来たした場合の作者の自画像である。「わたしはスウィフトほど頭の好い一代の鬼才に生まれなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。」（「侏儒の言葉」）は、芥川龍之介による反語でなければならない。「（スウィフトより頭脳明晰な私は、彼よりも速やかに精神的な破綻に陥る可能性がある）」という裏返しの矜持である。スウィフトのこの挿話の次に登場するのは、改造社主催の講演旅行帰宅時府立三中校長であった八田三喜の要請による旧制新潟高校での講演会の時である。「ポーの一面」（「新潟高校」昭和二年五月二十三日）の講演後、学校関係者との座談会でスウィフトのこの挿話を披露している。（「新潟高校関係者との座談内容の詳細は、葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』に収録されている」）。以上の一連の経過を経て「彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウィフトの見た、木末から枯れて来る木のやうに。・・・・・・」（「或阿呆の一生」四十六）の作者の最終的な述懐になる。

（註５）葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」（「槍ヶ岳紀行」）は、編者葛巻義敏解説に拠ると府立三中時代に挙行された槍ヶ岳紀行（「明治四十二年八月八日―十日」）の実録記録を小冊子にまとめたものである。記録は島々の宿の記述（「八月十日」）で終わっているが、行動メモを参照して実録風に記述したらしくて逐次正確に地名を記録して写実的である。

八月八日午前四時半起床し、自宅（「本所区小泉町十五番地」〔墨田区東両国三丁目〕）に来た中塚癸巳男と新宿駅に、中原安太郎と市村友三郎（「葛巻義敏解説」）それに山口貞亮（伊藤一郎「芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋」）の三人がすでに新宿駅に来ていた。新宿発八時五十四分の松本行乗車、松本着九時五分着で養老館宿泊（途中の高尾山、小仏隧道、猿橋、大月、甲府、茅ケ岳や八ヶ岳の眺望、上諏訪、下諏訪、松本までの記述事項は精緻を極めて写実に徹しているが、車中で芥川

龍之介は「子規句集」を読んでいる事に関連した筆致かも知れない。)

八月九日朝四時に松本養老館で起床、島々村まで五里の道筋。途中梓川、安曇野を経て養老館で紹介された中屋という宿屋で昼食を摂る。この中屋で休息し、芥川龍之介は疲労で昼寝をして夜起きだし、野外の温泉に行き夜は熟睡、翌日八月十日の起床で小冊子「槍ヶ岳紀行」は途切れている。自宅に来る予定だった中原安太郎は、後年「学校友だち」(「中央公論」大正十五年二月)でその横顔が紹介されている。西川英次郎と並ぶ秀才で三井物産から実業方面に進出したらしく、芥川龍之介に別荘を進呈したいといい実行出来ないでいると揶揄されている。「槍ヶ岳紀行」は、具体的な地名や行動を共にする四人の府立三中同伴者の行動、その細部の記録から備忘録を参考にした帰宅直後の執筆である事が分かる。

「槍ヶ岳紀行」が登山直後の備忘録の体裁に準じているのに反して「槍ヶ岳に登つた記」(「明治四十四年頃」)はやや整理された形式である。こうした事情から最初の全集編纂者が作品末尾に「(明治四十四年頃)」の但し書きを付記したのであろう。「槍ヶ岳紀行」は、島々の宿での朝起床で終わっている。二年後の「槍ヶ岳に登つた記」は、その後の槍ヶ岳登攀記録である。しかし、順次登攀の記録を筆記したのではなくその後の登攀の二箇所の寸描である。「槍ヶ岳に登つた記」(「赤沢」「朝三時」)は登攀の二場面である。前者は、島々の宿を出立してから二つ目の山小屋周辺の印象を後者は、三つ目の山小屋から早朝の槍ヶ岳に最終登攀を試みる同行者の行動を記録した場面である。先頭は、中原安太郎で次いで芥川龍之介が後を追う。二人の後を追いかけるように市村友三郎と中塚癸巳男の二人が追いかける。

こうして槍ヶ岳登攀の十二年後に「槍ヶ嶽紀行」(「改造」大正九年六月)が出される。内容は前二作とは様変わりして孤独な単独者、作者と思しき「私」の単独行である。「槍ヶ嶽紀行」(「一」「二」「三」「四」)は、全体が四章から成り立つが、槍ヶ岳登攀を記録しながら前記「槍ヶ岳紀行」「槍ヶ岳に登つた記」とは、ほとんど重ならない。二作に記述されなかった槍ヶ岳登攀の記憶を十二年後に筆記して見せたのである。「槍ヶ嶽紀行」と「河童」(「一」)とは近接していて類似を見せている。

(註6)芥川龍之介個人に取って人間として河童の国に居住することは、狂気に陥り正常な生活を営む事の出来なくなった自身の自画像である。河童の国から帰還する事で精神病院に終生を終える事は、戦慄すべき未来の自分の人生だった。「河童」の作品構図は、晩年の芥川龍之介の社会に対する違和感が極地まで達している事を窺わせる。世間は気違い病院だという認識により自殺した訣だが、「河童」で見せた社会に対する違和感は不思議に太宰治「人間失格」の構図に似ている。「河童」典拠の一つである「ガリバー旅行記」の原作者も当時の英国社会に対する違和感からこの風刺小説を執筆したことは知られている。「猿の惑星」の著者も仏領インドシナでの植民地行政官としての特権を日本軍人に奪われ、奴隷に落された境遇を一編の風刺小説に託した訣だが、当然こうした先行作品も脳裏にあったはずである。

(註7)病気を発症した宇野浩二を目撃した芥川龍之介の衝撃と驚愕の様子を広津和郎「あの時代」(「群像」昭和二十五年一月－二月)は、記録している。「今朝宇野をたずねたんだよ。実に吃驚(びっくり)したよ。・・・・・・」(「あの時代」二)という発言がそれである。発狂した宇野浩二が精神が破綻しながら部分的に極めて正常で、ある側面鋭敏に成っている具体的な状況も記録に残された。宇野浩二の場合、精神破綻は第三者から認識出来得る状況に至るまで発症するも治療を受けて全快した。芥川龍之介は肉体的な衰弱と共に神経が鋭敏に作用して独自の作風を確立、次々傑作を生み出したが、精神的な破綻直前に自らを追い込み鋭利な作風を確立すべく努めた節が見られる。平穏な日常が、創作行為に沈滞と退屈を齎(もたら)す事を体験から認知し、最晩年の芥川龍之介の置かれた事態に自らを追い込み創作世界に栄光を齎す事に成功したのは後進の三島由紀夫である。

広津和郎「同時代の作家たち」(「あの時代」四)に拠れば、精神に変調を来たした宇野浩二が女医を看護婦と見間違えて暴言を吐いて相手を憤激させた友人の広津和郎を窘める場面がある。「無論女医さ。僕は初めから解っていたよ。君には解らなかったのかい。白服の下にメリンスの襟が出ていたじゃないか」という宇野浩二の発言を受けて、これではどちらが正気でどちらが異常であるか分からない、と感想が述べられている。しかし、この惨愴たる宇野浩二の状態が芥川龍之介に衝撃を与えた訣である。精神のある側面が健全に鋭く作用しながら部分的に変調して狂気に陥っている状況が、最終的に芥川龍之介に自殺を決行させた最

大の要因である。

（註８）「僕」（「河童」）が人間世界から河童世界に転落して異質文化を体現する場面は、正気から狂気に陥る決定的な場面である。「忽ち深い闇の中へまつ逆さまに転げ落ちました。（中略）僕は唯目の前に稲妻に似たものを感じたぎり、いつの間にか正気を失つてゐました。」（一）、この場面を芥川龍之介は何処から借用したのであろうか。異次元世界に迷う心霊現象を芥川龍之介は、数ヵ月後に記述している。基督教徒迫害の為にダマスカスに向かうパウロは、路上で心霊現象に拠る基督の声を聞き改悛する場面である。「サウロよ、サウロよ、何の為にわたしを苦しめるのか？棘のある鞭を蹴ることは決し手易いものではない。」（「西方の人」三十五）という有名なパウロ改悛の場面である。以上から示唆を与えたのは、「新訳聖書」（「使途行伝」第二十六章十四）であると思われる。

（註９）これなどは平凡な日本人が、北朝鮮に拉致され平壌市民が体験出来ない特権を感受する状況に似ていないでもない。戦前の旧制高等学校等で勤務する欧州の外国人教師は一般日本社会の特権階層であるが、亜細亜の植民地社会で君臨する本国から派遣された殖民地行政官は現地住民に対しては神であった。大東亜戦争で亜細亜諸国に軍事的に侵攻した日本は、植民地に数百年君臨した神の特権を剥奪し、奴隷の地位に落としたのである。日本帝国の一兵卒であった会田雄次は、特権階層である白人が肉体労働する現場を目撃してその新鮮な驚きを記録に残している。

戦後日本社会は占領軍により、華族などという愚劣な種族は消滅せられ経済的には一律平等社会を招来させた。しかし、精神世界では国民の平等は齎されなかった、と言うより国民総貴族社会に突入したと言える。あるいは国民総奴隷社会に転落したといえるかも知れない。最高級の学歴を取得した者は、以前ほどの特権を享受できず精神錯乱状態に陥り、社会の底辺で蠢いて老年を迎えた無能な老人は、特殊政治集団や新興宗教の組織の権力で大学の中枢に入り込み横暴を極めている。私個人の体験では、半世紀を学界の貴公子と尊称された教授も、日本社会で半生を下層社会で生きた者も、彼等の行動は、同一である。誠にニーチェの謂うように「上を見ても賤民、下を見ても賤民」と言うのが現実だ。

東京で生まれ東京で育ちながら芥川龍之介が、当時こうした複眼的な思考を持っていたのは不思議である。日本在住で日本語に堪能な友人愛蘭人ジョーンズに対する当時の人々の処遇などから示唆を得た可能性がある。「河童は我我人間が河童のことを知つてゐるよりも遙かに人間のことを知ってゐます。」（二）、その理由を芥川龍之介は人間に目撃される河童よりも河童と共生している人間の数の方が多いからであると説明している。しかし、この一文の実質的な意味は東京在住の芥川龍之介が、頻繁に地方への旅行を繰り返す事で田舎の者が実に詳細な東京情報を得ていることを実感していたからである。こうした現状は、東京と地方の格差の比較的なくなった現在においても基本的には変らない。国家間においても欧米の情報の摂取に熱心ではあるが、近隣亜細亜諸国の事情に疎いのは現在も事実である。戦時下日本人は、意識的に欧米の情報を遮断して滑稽な国粋主義に流れたのに反して米国は敵国日本の文化摂取に努力して反対の現象も見られたが、一時的な現象であった。

日本在住の欧米人はお客様であるのに反して、亜細亜諸国の在住者に向けられる日本人の視線は今も昔と同じく冷酷な生活者の視線である。しかし、欧米人も以前ほどのうまみを日本社会で享受する事は難しくなって来ている。日本社会が欧米人に対して冷静な認識を持つに至った事や国民の多くが欧米の地を実見し、現実の姿を認識してきた事が関係している。萩原朔太郎「純情小曲集」（「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん。・・・・・・」（「旅上」）という嘆きは過去のものであるが、同時に日本人は異国に対する憧憬という心情的形態をも喪失した。

河童世界で特権を享受した「僕」が人間社会に帰還するや狂人として隔離される構図は、現在も見られる。海外の日本人学校で給与を得て亜細亜諸国で王族の生活を経験してきた者は、帰国後の日本社会での無収入の生活に煉獄を覚えるだろう。東京の過当競争で社会の底辺を生きた老人が、辺境の地に来て無能さを隠して特権を手に入れた場合、彼は再度東京に戻り市民生活を営む事など不可能である。老衰で最後の息を引き取るまで偏狭の地で一時の過去の栄光を夢見て生き続ける。索漠たる外地で仏蘭西文学の臭いを漂わせ、日本人社会で頂点を極めた人妻の凋落を松本清張「赤い籤」（「オール讀物」昭和三十年六月）は描いている。

「藝術に於ては、親分も子分も、また友人さへ、無い」

(「如是我聞」三)と公言した太宰治でも弟子達との酒宴に侍った三島由紀夫により、司祭と信徒との擬似的な家族関係を思わせる甘さが周辺に満ちていたと記述されている。「私の遍歴時代」の記載事項を信じるならば、河童と人間との境界は曖昧になっていると言えるかも知れない。

(註10)数ヶ月前の「河童」を素案にしてそのある側面を収斂し執筆したのが遺書「或旧友へ送る手記」であるが、これに触発された川端康成「末期の眼」(「芸術家は一代にして生れるものではないと、私は考へてゐる。父祖の血が幾代かを経て、一輪咲いた花である。」)の一文がある。これは遺書「或旧友へ送る手記」を媒介にして「河童」(四)に記録された遺伝に就いての考察を示したものだ。「僕は生れたくはありません。・・・・・・」(「河童」四)は、遺稿においても繰り返される。「遺伝、境遇、偶然、—我々の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んで善い。しかし他を云々するのは僭越である。」(「侏儒の言葉」運命)、これは言葉を変えて「闇中問答」(「四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然—僕の責任は四分の一だ」)で使われている。

以下、この遺伝の問題について具体的に考察する。「自分に伝わっていると信じる悪遺伝を、度を越えて心配した彼自身を的確に語るものであろう。」(吉田精一「芥川龍之介(三十四)」)の具体的な内容である。「のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？」(「歯車」一)、眼球の痙攣から生じる一時的な現象「半透明の歯車」を緊迫する精神障害の前兆という前提で認識する、芥川龍之介流のある種の天才主義である。あるいは眼球の炎症から起きた延焼火災の錯覚を友人に事々しく語って聞かせた。「今日鵠沼を出て来て汽車に乗ると、沿線が真赤に燃えてるんだよ」(「あの時代—芥川と宇野—」一)、これらの一連の行動は芥川龍之介独特の天才主義に結びつける行動の一環である。

廃人となった実母の記憶を再現し幼児の記憶に立ち戻らせた、フラッシュバック(「flashback」)で戦慄を覚えさせたのは、友人宇野浩二の発狂である。宇野浩二の病跡は、神経衰弱ではなくて「マニイ」(「mania」躁病)であると広津和郎は言い、宇野浩二自身も認識している。「無論マニイさ。みんなは遠慮していわないが、僕にはよく解っているんだ。・・・・・・」(「あの時代」四)、しかしこれに就いては松本清張「芥川龍之介の死」では明瞭に病原を明かしている。ジフィリス(「die Syphilis」梅毒)に罹患したのは、特別なことではなくて宇野浩二の運が悪かったというのが松本清張の言である。

実母フクに抱かれた生後間もない芥川龍之介、当時三十三歳であった新原フクに抱かれた肖像を見ると実母は、最晩年の芥川龍之介そっくりである。生前芥川龍之介は、一度も実母の存在を疑った事はなかったろう。実父新原敏三の肖像は、芥川龍之介に類似の横顔を見出し得ない。芥川龍之介生誕後八ヶ月で発狂し、十歳の時に死んだ実母の経歴に就いて芥川龍之介自身はどのような認識を抱いていたか。「其母これらの凡の事を心に蔵めぬ」(「ルカ傳」第二章五十一)を引用して、「マリアはクリストの言葉の為にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に—或は人氣のない夜中に当然彼女を驚かした聖霊の姿も思い出したかも知れない。」(「続西方の人」八)と解説した。これは、発狂した実母芥川フクの人生に何らかの私生活上のドラマを実子芥川龍之介が憶測している場面である。芥川フクと新原敏三の間に生を受けた芥川龍之介は、自己の存在を「麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。」(「西方の人」五)と認識していた。「メリメは告白を嫌つた人である。しかし『コロンバ』は隠約の間に彼自身を語つてはゐないであらうか？」(「侏儒の言葉」告白)と自身言うとおり、最後の作品「西方の人」は芥川龍之介の「隠約の間」の告白に満ちている。

実母の思い出を記した「点鬼簿」には、発狂した実母の姿とその臭いが生々しく記述された。「僕はいつか西廂記を讀み、土口氣泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顔を、一痩せ細つた横顔を思ひ出した。」(「点鬼簿」一)、この時の臭気を友人宇野浩二の体臭に感じた事が芥川龍之介に自殺を決行させる決断力になった。

(註11)死後に久米正雄に託された「或旧友へ送る手記」に記述された記載事項は、別の視点から詩人トツクの自殺の場面「河童」(十三)で表現されている。「河童」(十三)の実質内容である「或旧友へ送る手記」の波紋について記述しておく。この遺書に就いては、谷崎潤一郎「饒舌録」(感想)で三点を疑問視している。(①「食色にも倦いた」②「氷のやうに透み渡つた、病的な神経の世界」③「ぼんやりした不安」)、結局芥川龍之介

は文壇で生存できなかった人であると結論付けた。「彼は自ら一番住み心地がいいとしてゐた文壇にさへ住むに堪へなかつたのである。何と云ふ傷ましい人であることか。」（「饒舌録〔感想〕」）という意見を残している。谷崎潤一郎の感想の直前には、成瀬正一から仄聞したと思しき大学教授の生態に就いての芥川龍之介の感想が紹介されている。「僕はこの間大学のプロフエツサー連の軋轢の激しいことを聞きましたが、そのやり方が女性的で而も悪辣を極めてゐるには、聞いて実にあきれましたよ。」という意見である。

ここには、校務多忙の海軍機関学校を辞して東京に帰還後に慶応大学に就職しようとした折の自身の体験がある。別の所で谷崎潤一郎は、芥川龍之介に就いて「聡明で、勤勉で、才気煥発で、而も友情に篤くつて、外には何の申し分もない、」（「いたましき人」昭和二年九月）と述べたが、芥川龍之介のこの聡明さは、大学教授に不向きであったと言える。大学人には、愚者の楽園の要素がある。無能な老人、能無しの後輩からの攻撃をかわす為に臨機応変なカメレオンのように状況に応じて色を変えて生きなくてはならない。ある時は、生存の為に無能を数十年に亘り演技しなくてはならないし、余りに長期に及んで無能を演じて本当の無能になってしまった例も無数に存在する。

人生の途上で悩んだ芥川龍之介に谷崎潤一郎は、それを「シエンキウイツチの『悪魔』に見込まれた」（「饒舌録〔感想〕」）一瞬であると言い、一時的なものであると助言している。里見弴は、芥川龍之介のこの閉塞感に対して人を介して勇気を奮い起こすように助言したと谷崎潤一郎は、思い出を記す。志賀直哉の回想では、行き詰った芥川龍之介を励ますのに「冬眠してゐるやうな気持で一年でも二年でも書かずにゐたら」（「沓掛にて」）という助言である。しかし、当然この言葉は芥川龍之介を納得させ得るものではなかった。ここで志賀直哉は、自分のように創作しか成し得ぬ者は行き詰っても創作世界に戻るより仕方がないが、芥川龍之介のように才気のある者は研究や考証のような方面に局面打開を図るのではないかという感想を寄せた。つまりは大学教授への転進であるが、結局芥川龍之介はそうなり得なかったと結論付けている。

これは先の芥川龍之介葬儀の後に参集の泉鏡花、里見弴、水上滝太郎（みなかみたきたろう）、久保田万太郎、谷崎潤一郎等が小石川の偕楽園での故人の追想に関しての結論と同じである。しかし、芥川龍之介が厭う大学世界も戦前は男世界で、殺し合い直前での杯を交わす和解の道の残された世界であった筈だ。やくざ世界も女が絡めば殺し合いで収集がつかないが、男同士の殺戮だったら解決の道は残されている。戦後の大学人の闘争に決着や和解がつかなくなったのは女が介在し、さらにはイデオロギーが入り込んだからである。

「或旧友へ送る手記」を書いた芥川龍之介の病理学的な側面は「河童」（十三）で事前に描かれたが、死後は川端康成「末期の眼」（「文藝」昭和八年十二月）で再検証されている。「けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。」（「或旧友へ送る手記」）から随筆の題名を借用した川端康成は、「あらゆる藝術の極意（ごくい）は、この『末期の眼』であらう。」（「末期の眼」）と結論付けた。その意味はささやかな自然の営みに全神経が感応して、全身全霊でそれに触覚するからである。

（註12）ここで描かれている学生ラツプを苦しめる家庭内の煩悶、「ラツプは両手を顔に埋（うづ）め、何も言はずに泣いてしまひました。」（十）は、この時期の芥川龍之介の家族間での日常の苛立ちを反映したものだ。最晩年肉体的、精神的に衰弱し窮地に追い込まれた芥川龍之介を側面から補助する者は周辺に皆無であった。「僕は養家に人となり、我儘らしい我儘を言つたことはなかつた。」（「遺書」）、こうした自覚を持つ芥川龍之介は最後に消えてしまった見たことのない亡姉に実母に救済の手を委ねている。御家人同士の死闘の中で鎌倉将軍源実朝が、最後に戦死した源氏の武士の霊魂に救済を求めたのと同じである。「僕はなぜかこの姉に、一全然僕の見知らない姉に或親しみを感じてゐる。」「僕は時々幻のやうに僕の母とも姉つかない四十恰好の女人が一人、どこからか僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。」（「点鬼簿」二）、「点鬼簿」発表後に芥川龍之介は、海軍機関学校時代に馴染みになった人妻野々口豊子宅に外泊（「十二月三十日―一月二日」）して窮状を訴え駆け落ち話、あるいは心中話を持ちかけている。

田端の自宅に帰宅直後に義兄西川豊の鉄道自殺の報に接する。「君、義兄の奴が自殺してね」（「あの時代」一）、この時期芥川龍之介は敵手（てきしゅ）である広津和郎に窮状を訴えているが、広津和郎の助言「われわれの年齢の義務なんじゃないかな。」は真っ当なものだが、具体的な助力にならなかった。芥川龍之介の扶養家族は、芥川文と三人の子供、養父母、伯母さらに甥の葛巻義敏がいた。さらに実姉葛巻ヒサには四人の子供がいて、

この姉とその子供達も芥川龍之介に扶養の義務が生じる事態になったのである。肝心の芥川文は、幼妻で頼りにならず。本来芥川龍之介を側面が支えるべき義弟塚本八洲は、瀕死の結核患者で頼りにならなかった。芥川龍之介の妻が幼な妻文ではなくて、才気煥発な吉田弥生であったら、窮地の芥川龍之介を支え養父母を抑え、家庭内の伯母の発言を制したであろう。その事を事前に察知した伯母は、夜通し泣いて彼女との結婚に反対して言いなりになる塚本文を迎えさせたのであろう。晩年駆け落ち話を持ちかけた鎌倉小町園経営の野々口豊子は、芥川龍之介より一歳年上で喪失した吉田弥生の身代わりの可能性があった。

身近にいた記者は、煩悶し苦悶し絶命する芥川龍之介の横顔を寸描している。「私は芥川さんが自殺に失敗した四日前の七月二十日に芥川家を訪ねた」(沖本常吉「芥川龍之介以前」)に依れば、芥川龍之介は七月二十四の四日前に自殺に失敗していた事になる。「唯僕の知つてゐる女人は僕と一しよに死なうとした。が、それは僕等の為には出来ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。」(「或旧友へ送る手記」)に至るまでに田端の芥川龍之介邸で言語に絶した煩悶の日々があった事を推測させる。学生ラツプが、家庭内のいざこざの心労で顔を覆うまでには、彼の些細な言動で泣き崩れる妹、それを慰める母親と対立する叔母の存在がある。父親は、家族全体に罵声を浴びせて弟は、家を飛び出してしまう。以上の学生ラップの家庭の不協和音は、田端の芥川龍之介邸の直接的な反映である。芥川龍之介の叱責に萎縮する幼妻文と叱責する伯母、さらに対立する養父母の存在。実母の再婚で居場所を失い芥川龍之介家で養われながら家出を繰り返す甥の葛巻義敏の存在がある。

「僕はこの養父母に對する『孝行に似たもの』も後悔してゐる。」(「遺書」)と遺言した芥川龍之介も佐藤春夫の回想によれば、癇癪を起こして湯呑を縁石に投げつけたそうである。佐藤春夫は、彼は日常においてそうした感情の発露を率直に発現させるべきであったと感想を述べた。有島生馬「嘘の果」(「開放」大正八年六月)を評した芥川龍之介「大正八年の文壇」(「大阪毎日新聞」大正八年六月)での批判的な文意を気にした芥川龍之介が、有島生馬に直接面談の折に恐縮した姿勢、社交儀礼を見せた事を皮肉った有島生馬「嫌みで下等な批評」(「新潮」大正八年十二月)を読んで憤激した芥川龍之介「有島生馬君に与ふ」(「新潮」大正九年一月)を読んだ佐藤春夫は、その率直な事を激賞した。芥川龍之介に拠れば、自分は取り分けて駄作を駄作と言わないだけだ。莫迦に向かって格別にお前は莫迦だと言わないだけで、莫迦に対して天才、鬼才という賛辞を送った事など一度も無いと言う、意味の説明文、批評文が田舎者佐藤春夫を歓喜させた訣である。

(注13)家族問題で悩む学生ラツプを引率して僕は、詩人のトツクを訪問しようとするも家族を持たない自由主義者であるトツクの代わりに音楽家クラバツクを訪問する。ここで問題視され討論されているのは、芸術作品評価の課題、批評家の問題である。青年作家芥川龍之介に師の夏目漱石は、文壇を相手にしてはいけないと助言した。そして夫子自身繰り返して文壇を相手にして大成しないと後進を指導した。しかし、芥川龍之介程に文壇の評価を気に病んだ作家はいない。愛人秀ひで子を弟子の南部修太郎に奪われた芥川龍之介は、「藪の中」で恋敵である弟子に挑戦したという説が受け入れられている。「ただ牛のやうに圖々しく進んで行くのが大事です。」(「芥川龍之介宛書簡」大正五年八月二十四日)という夏目漱石の忠告は、弟子に伝わらなかった。

「河童」(十)の後半で展開されているのは、当時の芥川龍之介にとって最も切実な問題である、自作に関する文壇の評価に就いてである。「どうするものか？批評家の阿呆め？僕の抒情詩はトツクの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」(十)、これは今まで芥川龍之介を苦しめて来た時々の文壇評価に就いての一般的な意見であろう。芥川龍之介自身は早くに文壇に超然としていたいという個人的な感想を持ってはいた。「僕も批評と云ふ方面でだけ現代と没交渉になつて、益々自由を尊重して行かうと思つてゐる。」(「井川恭宛書簡」大正六年九月四日)、しかし現実はこれとは反対に展開していった。この時期文壇から距離を置いていた谷崎潤一郎も例外ではない。「饒舌録」(「改造」昭和二年二月)の冒頭で谷崎潤一郎は、予防線を張っていて「実は時評をする積りはない。」と言いながらたちまち前言を翻して「新潮合評会」(「新潮」昭和二年二月)の芥川龍之介発言「僕は谷崎氏の作品に就て言をはさみたい」を受けて自然に論争に深入りして行く。「饒舌録」の予定広告「十一月號の改造の豫告に私が新年から文藝時評を擔任するとある」が、自分は時評はやらない。先輩作家正宗白鳥からその旨の助言

を受けているが、「君は来年から改造へ時評を書くのかね、時評を書くといろいろの人から議論を吹つ掛けられる、すると黙つてゐる譯にも行かないので、つい報酬する、いやいやながら自然文壇に活躍する形になつて、うるさいもんだよ」という助言である。しかし、結果は近代文学史上名高い論争を誘発させてしまう。実に太宰治の言うように「批評をみじんも氣にしないといふ脱俗人（そんな脱俗人は、古今東西、一人もゐなかつた事を保證する）」である。

「・・・・・・。しかしロツクの音楽は君の音楽に溢（あふ）れてゐる近代的情熱を持つてゐない。」（十）、これは志賀直哉の面前で拝跪する芥川龍之介に対して知人の誰かが投げ掛けた賛辞である。現実を即物的に掌握する志賀直哉の文体とその息吹に感服する芥川龍之介は、師の漱石にその秘訣を聞くと自然体で外界を掌握するからではないか、という返答を得ている。自分にもあの種の文体を駆使する事は、出来かねるというのが芥川龍之介に与えた夏目漱石の返答である。「・・・・・・。ロツクはいつも安（やす）んじてあいつだけに出来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛（い）ら苛（い）らするのだ。・・・・・・」（十）、これも谷崎潤一郎の言う「斯くの如く左顧（さこ）右眄（うべん）してゐる君」（「饒舌録」）あるいは志賀直哉の言う「芥川君は始終自身の藝術に疑ひを持つて居た。それだけに、もつと伸びる人だと私は思つてゐた。」（「沓掛にて」）という芥川龍之介の才能に就いての感想を述べた箇所である。

「・・・・・・。―僕等の知らない何ものかは僕を、―クラバツクを嘲（あざけ）る為にロツクを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマツグはかう云ふことを何も彼（か）も承知してゐる。・・・・・・」（十）、この一文の文意は志賀直哉の存在を眺望する事が自己反省を強いるという意味である。哲学者のマツグの存在は、芥川龍之介に取って誰であろうか。詩人のトツクに拠れば、クラバツクは神経衰弱であるし、そう言う本人もまた不眠症に苦しんでいる。僕と同伴で世紀末の悪鬼に囚われたような二人の芸術家を観察する学生ラツプも精神的に追い込まれて奇妙な行動を見せる。「学生のラツプはいつの間（ま）にか往来のまん中に脚をひろげ、しつきりない自動車や人通りを股目金（まためがね）に覗（のぞ）いてゐるのです。」（十）、要は誰もが皆精神の変調を来たしているのである。

この箇所は、当時の芥川龍之介周辺の作家群像を写した場面である。広津和郎「あの時代」に拠れば、芥川龍之介「点鬼簿」（「改造」大正十五年十月）に対して晩年の精神高揚期にあった徳田秋声「十月の作品（三）」（「時事新報」大正十五年十月九日）の否定的な見解に対して反論を寄せた広津和郎「文藝雑感」（「報知新聞」大正十五年十月）は、人生の倦怠と不眠に苦しんでいた。その同世代人としての共感から「点鬼簿」に対して多少の賛辞を寄せた。これに対して芥川龍之介は直ちに感謝の書簡を送っているが、「近来意気が振わないだけに感謝した。」（「広津和郎宛書簡」大正十五年十月十七日）という内容のものである。睡眠薬を常備品として持ち歩く広津和郎に比するに芥川龍之介の方も重症の睡眠障害を抱えている。精神に変調を来たした宇野浩二に治療を施す精神科医である斉藤茂吉も多量の睡眠薬を携帯していて、宇野浩二よりも重症の睡眠障害を抱えている状態である。精神変調で精神科病棟に入院させられる宇野浩二がある側面で冷静で、付き添いの広津和郎が苛立ちで精神科の女医に対して切れている。

芥川龍之介が自作に就いての批評をいかに気に病んだか、村松梢風「近代作家伝」では作風の異なる志賀直哉に脱帽し、屈服する芥川龍之介の晩年に天才の末期を見ている。文壇を相手にしてはならないという師の漱石の忠告は、弟子の芥川龍之介には届かなかった。「澄江堂」に集結する後進に文壇批評を相手にするなと忠告しながら自身は、文壇批評に足元を掬（すく）われた。

(注14)「エピクロスの園」（「岩波文庫」昭和四十九年九月）には、翻訳者大塚幸男編の解説がある。それに拠れば芥川龍之介「侏儒の言葉」と「エピクロスの園」とは八項目で重複している。①「星」（「星」）②「鑑賞」（「観劇と読書」）③「告白」（「告白録について」）④「S・Mの知恵」（最後の行）」（「無知」）⑤「瑣事」（「官能的な人間の支払うべき代償」）⑥「批評学」（「詩人とわれわれ」）⑦「芸術（三番目の『又』）」（「すべての詩は機会の詩である」）⑧「賭博」（「賭博者」）、しかし剽窃とは言われないと大塚幸男解説は付け加えている。おそらく熟読の結果、「エピクロスの園」自体が芥川龍之介に取って自家薬籠中のものになっているという事であろう。

フランス「タイス」「バルタザール」の作品細部に亘る緻密な探索により、その構成を借用して谷崎潤一郎は、「麒麟」「刺青」で文壇登場を華々しく成した。永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」（「三田文学」明治四十四年十一月）は、この二作品の典拠がフランスの作品の応用編であることに推薦者は気付いていた。そして先輩作家の創作過程を十二分に検証して、自らの創作「鼻」

に応用したのは後進の芥川龍之介である。「鼻」は、森鴎外「諸国物語」「十人十話」を側面の知識としてシング「聖者の泉」を説話文学に応用したものである。芥川龍之介が推奨したのは、フランス「ユダヤの提督」である。この作品の物語り展開の筋道は、映画「ベンハー」遠景に登場の基督像に重なる。「歴史小説と云ふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠実でないものはない。(中略)フランスのピラトもこれである。」(「澄江堂雑記」九)と書くように「ユダヤの代官」の芥川龍之介文学への影響は当初から甚大なるものがある。芥川龍之介自身フランス「ユダヤの代官」に就いては、最後の作品「西方の人」で総括している。「ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢(つひ)に代名詞に過ぎない。後代(こうだい)も亦(また)この官吏に傳説的色彩を興へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはかう云ふ色彩に欺かれなかつた。」(「西方の人」三十)。